

岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書 第93集

七反田番場山
7・10・11号古墳

2005

財団法人 岐阜県教育文化財団

序

清らかな長良川が市域を西流し、斎藤道三・織田信長の居城として華やかな一舞台を飾った岐阜城が市街地を見下ろす岐阜市は、豊かな景観に恵まれ、堂々たる歴史を物語る町です。そして、今なお情緒ある町並みがいたるところに残っており、人々の暮らしの中にも風情と人情を感じられます。

このたび、岐阜県基盤整備部による主要地方道岐阜美濃線番場山トンネル工事に伴い、工事予定地内の埋蔵文化財の記録保存をはかるため、岐阜市加野に所在する七反田番場山7・10・11号古墳の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、主体部が横穴式石室である古墳2基と木棺直葬である古墳1基を検出し、須恵器・土師器・鉄製品などの当時の様相の分かる遺物が出土しました。特に、県内では古墳時代中期末から後期の木棺直葬の主体部をもつ古墳の調査事例は少なく、貴重な資料となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、岐阜市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 岐阜県教育文化財団
理事長 日比 治男

例言

- 1 本書は、岐阜県岐阜市加野山本地内に所在する七反田番場山7号古墳・七反田番場山10号古墳・七反田番場山11号古墳（岐阜県遺跡番号 21201-10126、10129、10130）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は主要地方道岐阜美濃線番場山トンネル工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部道路建設課から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は、伊藤秋男南山大学教授の指導のもとに、平成15年度に実施した。整理作業は平成16年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆分担は目次に示した。編集は三浦・小野木が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、地形測量・空中写真測量などの業務は朝日航洋株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。その結果は第4章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
内堀信雄、恩田裕之、島田崇正、横田宏、横幕大祐、渡邊博人
- 10 本文中の方位は、世界測地系第VII系の座標北を示している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第 1 章 調査の経緯.....	(三浦)	1
第 1 節 調査に至る経緯.....		1
第 2 節 調査の経過と方法.....		2
第 2 章 遺跡の位置と環境.....		5
第 1 節 地理的環境.....	(藤岡)	5
第 2 節 歴史的環境.....	(小野木)	6
第 3 章 調査の結果.....	(三浦・小野木)	9
第 1 節 基本層序.....		9
第 2 節 遺構と遺物の概要.....		9
第 3 節 7号古墳.....		11
第 4 節 10号古墳.....		23
第 5 節 11号古墳.....		27
第 4 章 自然科学分析.....		34
第 5 章 まとめ.....		39
第 1 節 調整区内の動向.....	(小野木)	39
第 2 節 古墳の時期と形態.....	(小野木)	40
第 3 節 古墳の石室石材.....	(藤岡)	41
第 4 節 須恵器の産地比較.....	(小野木)	44
参考文献		
写真図版		
報告書抄録		

挿図目次

図 1	調査地位置図.....	1
図 2	グリッド設定及び地形測量図.....	4
図 3	周辺遺跡位置図.....	7
図 4	基本層序.....	9
図 5	調査区全体図.....	10
図 6	7号古墳墳丘断面図.....	12
図 7	7号古墳石室実測図（1）.....	14
図 8	7号古墳石室実測図（2）.....	15
図 9	7号古墳側壁石・天井石の崩落状況.....	16
図10	7号古墳周溝断面図.....	17
図11	7号古墳前庭部外護列石の状況.....	18
図12	7号古墳出土遺物実測図.....	20
図13	7号古墳石室内遺物出土状況.....	22
図14	10号古墳石室内石組み出土状況.....	24
図15	10号古墳墳丘断面図.....	25
図16	10号古墳石室実測図.....	26
図17	11号古墳墳丘断面図.....	28
図18	11号古墳墓坑検出状況.....	28
図19	11号古墳墓坑完掘状況.....	29
図20	11号古墳出土遺物実測図（1）.....	31
図21	11号古墳出土遺物実測図（2）.....	32
図22	11号古墳周溝・墓坑、7号古墳周溝遺物出土状況.....	33
図23	土師器胎土中の粒子顕微鏡写真.....	37
図24	赤色顔料塊とポイント分析結果.....	38
図25	7・10号古墳の石材一覧.....	42
図26	石室使用の石材.....	43

表目次

表 1	周辺遺跡一覧表.....	6
表 2	7号古墳出土遺物観察表.....	21
表 3	11号古墳出土遺物観察表（1）.....	31
表 4	11号古墳出土遺物観察表（2）.....	32
表 5	土師器胎土の粘土及び砂粒の特徴.....	35
表 6	粘土塊の化学組成.....	36
表 7	調査区内の動向.....	39
表 8	古墳の諸要素.....	40
表 9	7・10号古墳の石材一覧.....	42
表10	須恵器の時期と産地の比較.....	44

写真図版目次

図版 1	調査区遠景	図版 7	7号古墳（5）
図版 2	調査区遠景・近景	図版 8	10号古墳
図版 3	7号古墳（1）	図版 9	11号古墳 他
図版 4	7号古墳（2）	図版10	7号古墳出土遺物
図版 5	7号古墳（3）	図版11	11号古墳出土遺物
図版 6	7号古墳（4）		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

岐阜県基盤整備部道路建設課では、交通混雑の緩和や冬季における円滑な交通の確保のために主要地方道岐阜美濃線の道路改良工事を計画した。

この建設工事に先立ち、岐阜市加野山本の番場山トンネル工事区域内に周知の古墳である七反田番場山7号古墳が存在することが判明した。これを受け岐阜県教育委員会及び財団法人岐阜県文化財保護センターが、平成14年12月10・12日に $15m^2$ の試掘確認調査を実施し、7号古墳の石室と周溝を検出した他、新たに2基の古墳の存在を確認した。

この試掘確認調査の結果を踏まえて、同月20日に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会が開催された。その結果、地形などの状況から調査範囲の上部にあたる急斜面は古墳の存在する可能性がなく、緩斜面部分の $800m^2$ の本発掘調査が必要であると判断された。そして、岐阜県基盤整備部道路建設課から岐阜県教育委員会が委託をうけ、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが本発掘調査を行うこととなった。

新規発見の古墳は、七反田番場山10・11号古墳と命名され、岐阜県遺跡番号21201-10129、21201-10130として登録された。



図1 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

1 調査期間

平成15年5月12日～8月18日

2 グリッド設定方法

発掘調査に先立ち、斜面の地形の様子を踏まえて、予想される古墳の主軸方向を基準にして調査区域内に4m×4mのグリッドを設定した。グリッドの名称は北から南(斜面上方～下方)に向かって1～8行、西～東に向かってA～K列とし、その呼称は北西角の杭番号を用いた。

3 調査対象面積

800m²

4 調査の経過

発掘調査の経過は以下のとおりである。

4月21日 地形測量、グリッド杭の設置。

28日 重機による表土掘削を開始。

5月7日 現場事務所の設置。現場への機材等搬入。

12日 作業員による人力掘削を開始。7・10号古墳にトレーナーを設定し掘削を開始。

22日 トレーナーにより古墳の様相を確認し、7・10号古墳の表土除去・石室内堆積土、7号古墳の周溝の掘削を開始。

27日 10号古墳石室の掘削を終了し、実測を開始。

28日 10号古墳の周溝を確認するためトレーナー掘削を開始。

6月3日 7号古墳に崩落した天井石を撤去。

4日 7号古墳羨道部の掘削を開始。

20日 7号古墳石室の掘削を終了、実測開始。

21日 11号古墳にトレーナーを設定し掘削を開始。

25日 指導調査員(南山大学教授伊藤秋男氏)現地指導。

7月2日 10号古墳周溝を確認するためトレーナー掘削を開始。

10日 11号古墳の周溝の掘削を開始。

17日 7号古墳の前庭部の掘削を開始。

25日 7号古墳の断ち割りを開始。

29日 10号古墳の前庭部の掘削を開始。

31日 ラジコンヘリコプターによる空中写真測量実施。

8月2日 現地説明会。

4日 10号古墳の断ち割りを開始。11号古墳の主体部の掘削を開始。

11日 作業員による掘削を終了。

17日 すべての実測を完了。

18日 現場撤収。

5 調査方法

(1) 石室

石室が露出した状態の7号古墳（周知の古墳）と、試掘確認調査で検出した調査区東側に位置する10号古墳、調査区の西側に位置する11号古墳の計3基を想定した調査を行った。具体的には、それぞれの古墳において地形から推定した石室の主軸を基準に小トレンチを入れて、石室内の堆積状況を確認すると共に、周溝の位置を把握した。調査は7・10号古墳を先行し、その調査の目次がついてから11号古墳の掘削を行った。

石室内部の掘削は小トレンチを入れながら、また必要に応じて礫や遺物の出土状況図などの記録を作成しながら進めていったが、石室石材の崩壊状況が予想よりも激しく、その除去にはかなりの労力を要した。出土遺物のうち床面直上に位置するものは、その出土状況を記録した。また、石室内部の堆積土については、そのすべてを水洗選別し遺物の発見に努めた。

(2) 周溝

小トレンチを古墳の北側、東側、西側と、必要に応じてその中間に入れ、土層の確認をしながら周溝を検出していった。遺構埋土と遺構検出面の土色・土質が類似しているため、その差を認識することに苦慮したが、7・11号古墳は周溝を検出することができ、遺物も出土した。なお、遺構掘削を進めいくうえで土色・土質の判別が難しい場合は、小トレンチを入れて判断した。

6 遺跡・遺物の公開・広報

平成15年7月24日に記者発表を行い、8月2日に現地説明会を行い140名の参加をみた。また、平成16年11月16日～12月19日に岐阜県博物館にて開催した「発掘速報展～いにしえの美濃と飛驒～」において主要な遺物の展示と解説を行った。

7 遺物・調査記録の整理作業

平成15～16年度に出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の流れは次の通りである。

遺物の洗浄→遺物の注記→土器の接合・補強・補修→遺物の実測・観察表の作成→

遺構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物・調査記録の収納・保管

なお、本報告書の執筆・編集は、上記の作業と並行して行った。

8 発掘調査及び整理作業の体制

	平成15年度	平成16年度
理事長	日比 治男	日比 治男
副理事長	高橋 宏之	高橋 宏之
副理事長	平光 明彦	平光 明彦
常務理事兼センター所長	福田 安昭	福田 安昭
経営課長	川瀬 崇敏	川瀬 崇敏
調査部長	武藤 貞昭	川部 誠
担当調査課長	藤岡比呂志	藤岡比呂志
担当調査員	三浦 徹大	小野木 学

第1章 調査の経緯

整理作業従事者 岩田のり子、小木曾美智、酒衛成功、菅原祐子、竹部泉、野尻みどり
山口久子、渡邊泉

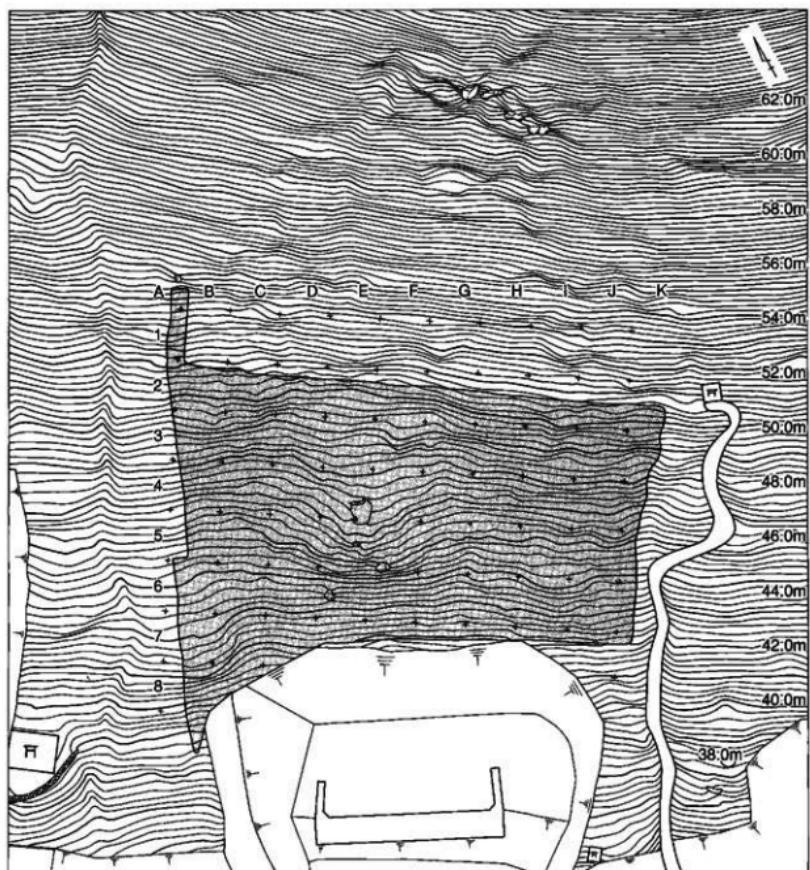


図2 グリッド設定及び地形測量図

0 10m

(S=1/400)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

七反田番場山古墳群は岐阜市の北東部にあり、地形的には独立丘陵として存在する番場山（標高137.8m）の南斜面上に位置する。周辺を見ると西北西一東南東方向に山地が並び、番場山の東においてそれらの山地を切って長良川が北から南へ流れている。番場山の北側には武儀川と長良川によってつくられた平地があり、南側にも狭いながら平地がある。

番場山周辺（岐阜市長良北部～芥見）は、標高420m以下の山地と谷部に存在する平地からなる。山地は、前述したように西北西一東南東方向に連なっており、番場山もそれら一連の山地の一つである。番場山の西北西及び東南東には150～200mの頂をもつやや低い山地が並ぶ。それに比べて、番場山より1.5～2kmほど南には300～420mの頂をもつ山地の並びが存在する。

番場山周辺の山地は美濃帯堆積岩類からなり、この山地の地形に関しては次の2つの地質現象が大きく作用している。

- ・番場山より南へ3kmほどのところに、坂祝向斜と呼ばれる褶曲の軸が西北西一東南東方向に存在する。

- ・周辺の美濃帯堆積岩類は、砂岩主体の地層とチャート主体の地層の繰り返しからなっている。

この周辺の山地の方向は、坂祝向斜によって規制されている。その軸の方向（西北西一東南東方向）に同じ地質で同程度の高さの山地が分布することになる。また、山地をつくるチャートと砂岩は、物性がかなり異なる。チャートは侵食風化に強いため急崖をなす山体を形成し、砂岩層は侵食・風化に弱いため比較的なだらかな山体を形成する。そのような特徴をもっているため、西北西一東南東方向に急崖をなす山体と比較的なだらかな山体が交互に配列することになる。つまり、この周辺の山地は坂祝向斜がつくる地質構造の大枠に、チャートと砂岩という岩相の違いによる差別侵食が付け加わった地形がよく発達している場所である。

周辺部には広い範囲にわたって古墳が分布するが、地形・地質から古墳の分布を見ると、次の4つの箇所に分けられる。

- ・チャート層からなるがやや低い山地
- ・チャート層からなり高度が高い山地のふもと（南斜面）
- ・砂岩層からなる緩やかな傾斜地
- ・平地

この中で、七反田番場山古墳群は、チャート層からなるがやや低い山地の南斜面上にあると位置づけられる。

第2節 歴史的環境

七反田番場山古墳群は第1～4古墳群に分かれ、7・10・11号墳は第1古墳群内に位置する。以下、七反田番場山古墳群について、『岐阜市史通史編』に従い記載する。なお、古墳群の名称は『岐阜市史通史編』では第1～4支群、『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』では第1～4古墳群と呼称されており、本書では後者に従う。なお、以下のカッコ内の番号は、表1と図3の番号に対応する。

第1古墳群（1）は丘陵の南端で、西へ突出した小支丘の南西山麓にあり、11基から成る。外形はいずれも円墳で、直径10～12mである。内部主体は横穴式石室で、4号古墳は川原石を使用している。遺物は1号古墳から須恵器（壺・平瓶）、3号古墳から土師器（壺）が出土している。

第2古墳群（2）は第1古墳群の北に位置し、やや東に入り込んだ小支谷の北西山麓に6基存在したが、昭和44年の圃地造成工事で滅失した。外形はいずれも直径10～12mの円墳であるが、3号古墳は14mである。内部主体は横穴式石室である。遺物は1号古墳から直刀、須恵器（壺・高壺・瑟）、3号古墳から直刀、鉄鎌、須恵器が出土している。

第3古墳群（3）は最も北の尾根から西側斜面にかけて11基存在していたが、昭和44年に滅失した。外形はいずれも円墳で、直径10m以下のものが多い。内部主体は横穴式石室で、川原石を使用している。遺物は1号古墳から勾玉、管玉、直刀、鉄鎌、須恵器、2号古墳から須恵器、4号古墳から直刀、須恵器（壺・高壺・壺・平瓶）、土師器、5号古墳から土師器、6号古墳から金環、土師器、10号古墳から土師器が出土している。

第4古墳群（4）は丘陵の東山麓にあり、8基から成る。外形はいずれも円墳で、規模の大きい古墳で7号古墳の直径14m、高さ3.5m、小さい古墳で2・4号古墳の直径9m、高さ2.5mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は1号古墳から勾玉、管玉、土師器、4号古墳から刀子、鉄鎌、須恵器（高壺・壺）、6号古墳から直刀、鉄鎌、土師器（壺）が出土している。4・6号古墳の石室内にある石棚は極めて特異なものとされている。

また、反田番場山古墳群周辺には、後期古墳が幾つか分布している。

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代
1	七反田番場山第1古墳群	古墳群	古墳
2	七反田番場山第2古墳群	古墳群	古墳
3	七反田番場山第3古墳群	古墳群	古墳
4	七反田番場山第4古墳群	古墳群	古墳
5	福富古墳群	古墳群	古墳
6	福富遺跡	散布地	古代～中世
7	福富出口遺跡	散布地	古代～中世
8	津口山遺跡	散布地	中世
9	岩井古墳群	古墳群	古墳
10	北長塚古墳群	古墳群	古墳
11	北長塚遺跡	散布地	縄文
12	加野西畠遺跡	散布地	古代～中世
13	加野南遺跡	散布地	古代～中世

番号	遺跡名	種類	時代
14	大藏山古墳	古墳	古墳
15	長良古津遺跡	散布地	
16	芥見町屋遺跡	散布地	古代～近世
17	芥見長山遺跡	集落跡	古代～中世
18	菱笠山古墳群	古墳群	古墳
19	岩田古墳群	古墳群	古墳
20	岩田西遺跡	散布地	古代～中世
21	岩田東A遺跡	散布地	古代～近世
22	鍋坂古墳	古墳	古墳
23	岩田東B遺跡	散布地	旧石器
24	朝倉古墳群	古墳群	古墳
25	朝倉窯跡群	古窯跡群	奈良
26	朝倉遺跡	散布地	縄文
27	大船古墳群	古墳群	古墳

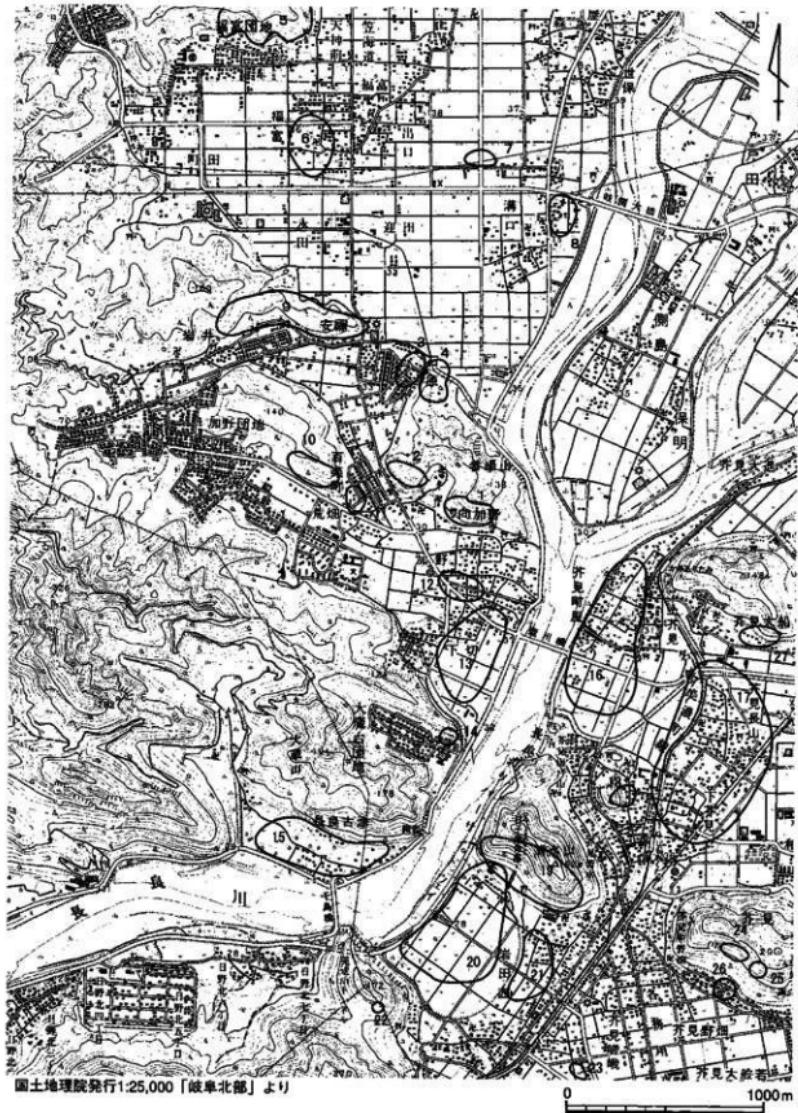


図3 周辺遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

福富古墳群（5）は6基の円墳から成る。規模の大きい古墳で1号古墳の直径13m、高さ3.0m、小さい古墳で4号古墳の直径8m、高さ2.0mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は1号古墳から環頭柄頭、馬具、須恵器（坏）が、3号古墳から須恵器（坏）が、5号古墳から須恵器（高坏・壺）が出土している。時期は7世紀前半である。

大蔵山古墳（14）は大正14年に発掘され、再び埋め戻されている。外形は円墳、内部主体は横穴式石室で、内部には砂岩製の長持型石棺があり、人骨が遺存していた。遺物は須恵器（坏）が出土している。時期は6～7世紀である。

蓑笠山古墳群（18）は2基の円墳から成り、1号古墳は直径12m、高さ2.4m、2号古墳は直径8m、高さ1.8mである。内部主体は不明であるが、1号古墳から須恵器（坏・平瓶・壺）などが出土した。時期は7世紀である。

岩田古墳群（19）は7基の円墳から成る。規模の大きい古墳で1号古墳の直径16m、高さ3.0m、小さい古墳で3号古墳の直径8m、高さ1.2mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は2号古墳から須恵器（坏・高坏）が、5号古墳から須恵器（坏・高坏・鰐）が、6号古墳から須恵器（高坏）が出土している。時期は6～7世紀である。

朝倉古墳群（24）は4基の円墳から成り、大正年間に発掘調査がなされたが昭和42年に滅失した。規模は7～11mで、内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は1号古墳から金環、直刀、須恵器（高坏・平瓶）、2号古墳から須恵器（高坏・壺）、鉄片、3号古墳から管玉、須恵器（壺・鰐）、4号古墳から須恵器（坏・壺）が出土している。時期は6～7世紀である。

大船古墳群（27）は2基以上の古墳の存在が考えられている。1・2号古墳ともに外形は円墳で、直径10m、高さ1～2mで内部主体は横穴式石室である。遺物は須恵器（坏・高坏・平瓶・提瓶・壺など）が出土している。時期は6～7世紀である。

このように、当遺跡周辺の古墳は大半が円墳で、内部主体は横穴式石室を有する。そのなかで、福富古墳群出土の環頭柄頭と馬具は、被葬者の階層性の高さを知る資料として重要である。

周辺の遺跡では詳細分布調査により、主に古代から近世の遺物が採集されている。

福富出土遺跡（7）では、須恵器、白壺、白瓷系陶器など、古代から中世の遺物が採集されている。

加野南遺跡（13）では、古代から中世の遺物が採集されており、特に中世の遺物が多量に散布している点が特徴である。なかでも、土師器皿や青白磁合子蓋の存在は注目される。

長良古津遺跡（15）では、白壺や白瓷系陶器、瀬戸美濃陶器（大窯、連房）などが採集されており、特に中近世の遺物が多い。

芥見町屋遺跡（16）では、土師器、須恵器、白壺、白瓷系陶器、土師器皿、古瀬戸、瀬戸美濃陶器（連房）、青磁、製塙土器など、古代から近世の遺物が採集されている。

芥見長山遺跡（17）では、昭和55年の発掘調査により堅穴住居跡12軒、掘立柱建物跡3棟、土坑43基、溝2条などの遺構を検出している。その時期は概ね8世紀中葉から9世紀初頭と考えられている。出土遺物は須恵器と土師器が多く、なかでも三彩の出土は注目できる。分布調査では、須恵器や土師器、白壺、白瓷系陶器、土師器皿、白磁など、古代から中世の遺物が多量に採集されている。

岩田東A遺跡（21）では、土師器、須恵器、白壺、白瓷系陶器、瀬戸美濃陶器（連房）など、古代から近世の遺物が採集されている。

第3章 調査の結果

第1節 基本層序

6層を古墳時代の表土（旧表土）として捉え、その下層を地山とした。周溝・石室は旧表土と地山を掘り込んで構築され、墳丘はその土を盛って造築されている。その上層については、斜面上方から流土層は調査区北壁では細かく分層できなかったが、11号古墳の試掘確認調査のトレンチでは4層に分層できた。

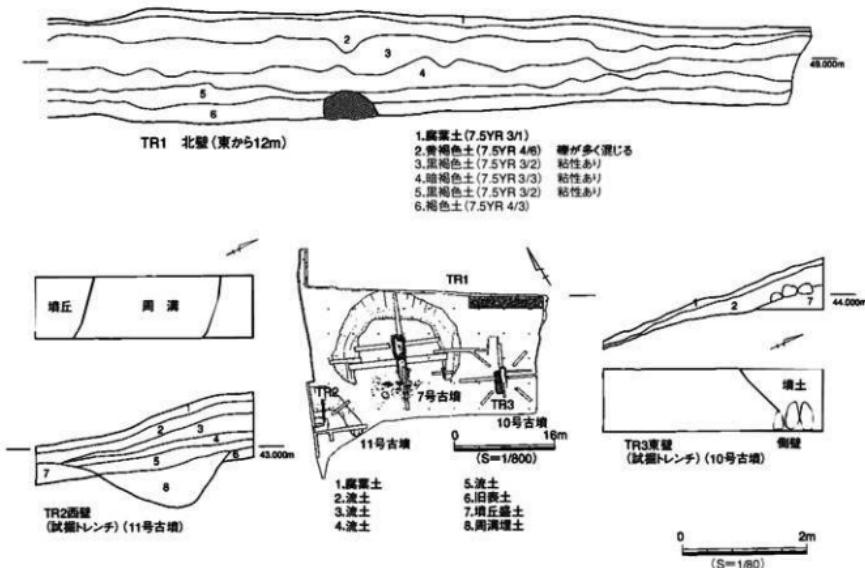


図4 基本層序

第2節 遺構と遺物の概要

7・10・11号古墳は、標高137.8mの番場山と呼ばれる独立丘陵の南端、標高40~48mの南東向きの斜面上に造築されている。この番場山の山麓には第1~4古墳群からなる番場山古墳群があり、調査区域は第1古墳群に属している。番場山南方には平地が広がっており、古墳の被葬者の生業は主にこの平地であったと考えている。

7号古墳は横穴式石室をもつ円墳で、調査区内では最大の規模をもつ。10号古墳も横穴式石室をもつ円墳であるが、周溝は検出できなかった。ともに石室が多数の川原石とチャートを混合して構築さ

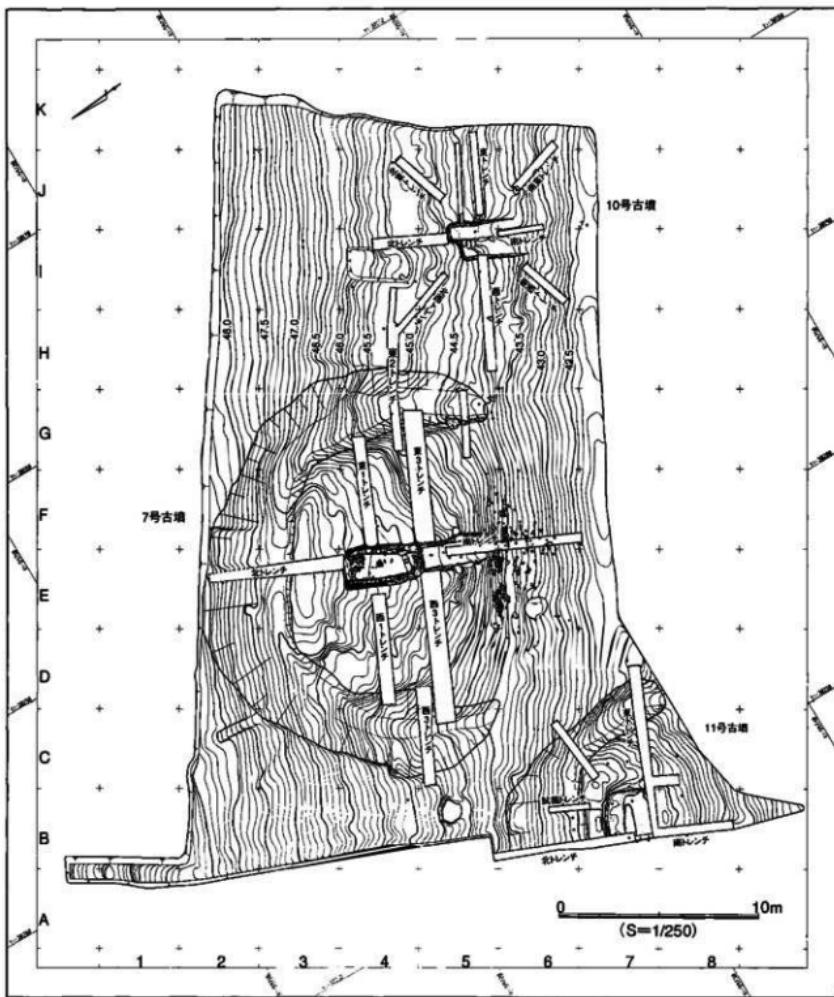


図5 調査区全体図

れている点に特色がある。11号古墳は石室をもたない木棺直葬の古墳であり、他の2基の古墳とは時期が異なる。また、11号古墳については墳丘及び周溝の一部のみは調査区外に位置しているため、その全貌は明らかでない。

7号古墳は天井石として配置されたチャートが地表に露出し、石室が開口している状態であった。地元住民の話では、加野地区は戦前までは低湿であり、水害を避けるため、この開口部分に食糧などを備蓄したり、古墳の開口部に入りて遊んだこともあったということである。また、調査区の西に位置する西光寺には番場山からの石が多数持ち込まれているということから、番場山の多くの古墳については後世の搅乱が行われているものと想像できる。なお、古墳以外の遺構は確認していない。

遺物は7号古墳の石室・墳丘・周溝、11号古墳の墓坑・周溝、包含層などから出土し、10号古墳からは出土していない。出土した全遺物の内訳は、接合後の破片数で須恵器71点、土師器55点、瀬戸美濃（連房）陶器2点、金属製品3点、石器1点、瓦3点、合計135点である（接合前では合計274点である）。なお、須恵器の分類、編年観、産地同定については渡邊博人氏に御指導いただいたが、文責は執筆者にある。

第3節 7号古墳（図6～13）

1 概要

7号古墳は調査区の中央に位置し、南東方向の10号古墳とは約17m隔てて隣接し、南西方向の11号古墳とは約18m離れている。直径約13.8mの円墳で調査区内で最大の古墳である。発掘調査前の状況は、天井石として配置されたチャートが地表面に露出した状態で石室が開口し、腐葉土などが堆積していた。その天井石は西側壁にかかり、東側壁が崩れて下方に落ち込み、傾いた状態であった。また、側壁は主に川原石を多く使用して構築されているため、その崩落・崩壊状況は激しく、調査前の予想を超えるものであった。

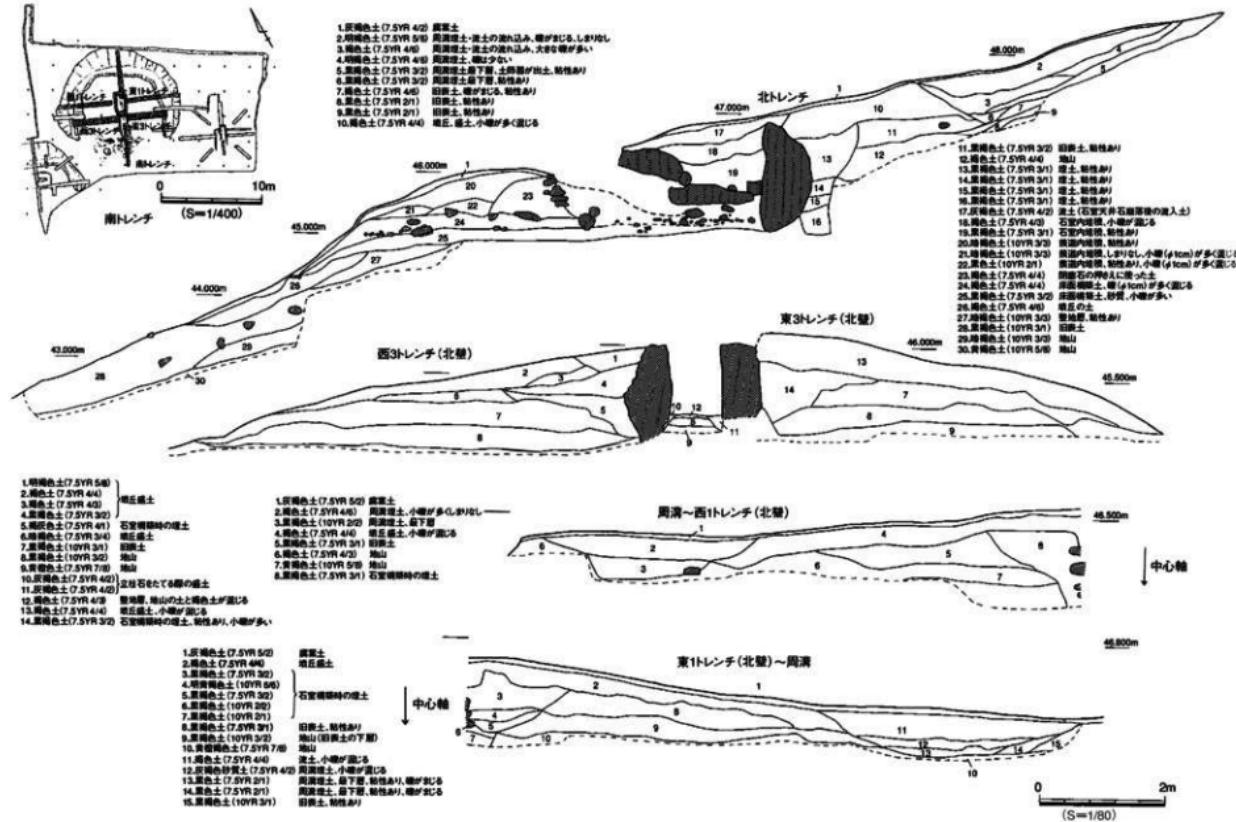
遺物は玄室・羨道・周溝から出土しているが量は多くない。後世においては信仰の対象にもなっていたらしく、開口部分から鏡貨（寛永通寶）が、墳丘から近世陶器がそれぞれ出土した。

2 墳丘

墳形は古墳北側は円形であるが、東側の裾で検出した外護列石は直線状に並んでいる。その他の部分では外護列石は斜面下方に流れ落ちてしまったと考えられ、確認できなかった。また、古墳南側の墳形は円形ではなく直線的な形となるが、これは斜面の立地条件によるものと思われる。以上のことから、7号古墳の墳形は円形と判断した。また、検出した周溝・外護列石から想定できる墳丘の規模は直径約13.8mである。

墳丘の元来の高さについては、側壁が崩れていること、天井石の大半が失われていること、残存している天井石が原位置を保っていないこと等などから不明である。

墳丘の構築状況は傾斜地形を利用して石室の基底部（旧表土・地山）を掘り込んで石室を構築し、その後、盛土をしている。また、墳丘断面の土層から石室の側壁を構築し、背後の裏込めを行い、その後に墳丘を造るための盛土をしていることを確認した。



3 内部主体

7号古墳は南南東に開口する両袖式の横穴式石室である。主軸はN-22°-Wである。玄門よりやや北側の位置に長さ1.5mの天井石が露出していた。

玄室は長さ3.2m、幅約1.2m、羨道部は長さ2.8m、幅約1mである。玄室から羨道部にかけての西側の側壁は内傾していた。

奥壁は1枚のチャート（縦約1.6m、横約1.3m）を置いて構築されている。玄室の側壁については川原石を積み重ねて造られ、立柱石（チャート）を境にして羨道部の側壁は主にチャートを積み重ねて構築されている。構築方法は、山の斜面を地山部分まで削り、1段目は楕円形の川原石の長辺を南北に並べて置き、2段目では楕円形の川原石の長辺を東西に並べている。奥壁の高さは1.6m、側壁は残存状況の良い箇所で1.2mである。奥壁とほぼ同じ高さまで川原石の側壁が構築されていたと考えられるが、その大部分は崩落しており、床面に積み重なった状態で検出した。

天井石を石室において2枚、石室前方に流れ落ちたものを1枚確認している（石材はすべてチャート）。石室内の2枚の天井石のうち、北側のものは床面にまで崩落し、完全に圧着した状態である。調査区内で確認できた3枚の天井石では、石室全体を覆うには面積的にかなり不足する。何らかの理由から後世において撤去されたものや斜面下方へと流出したものがあったと考えている。

床面は崩落天井石の圧着部分より、北側のみが僅かに残っていた程度である。天井石の撤去後、遺物の上方にある礫や川原石・堆積土を取り除いた後の状態を床面とみなした。長さ10cm程度のチャートが雜に並べられており、これが礫床にあたると考えている。残存部分以外は搅乱により様相が不明である。また、断ち割りの結果、床面の構築は1回のみと判断した。さらに遺物にも時期差が見られないことから追葬は行われていないと判断した。この完存していた北側の床面は、崩落し床面に圧着した天井石によって、後世において出入りができる状態であるため、出土遺物は埋葬当時の原位置を保っていると考えている。

玄室の入口には川原石を雜に4つ並べて、玄室の床面より高くした構造の段をもつ。この段の上位レベルは羨道部の床面のレベルとほぼ一致していることから、意図してこのような石室の構造にしたものと考えている。

玄室と羨道部の境においては、閉塞石が設置され良好に残存していた。おもに拳大の川原石とチャートを使って構築されている。特に玄室内側（北側）の積み方が整然としている。また、羨道部（南側）方向からは多量の土を用いて押さえ、玄門を閉じて固定した形跡を確認している。

羨道の側壁は基底部に川原石を使用している箇所もあるが、大半はチャートを用いて構築されている。玄室の構築方法と同じように、地山まで掘削し、石を置いている。さらに、床面構築のための整地土を入れ、玄室の段の高さに合わせている。また、この床面にチャートの側壁が削れて倒れていることから、羨道内部は空洞であったことが明らかである。

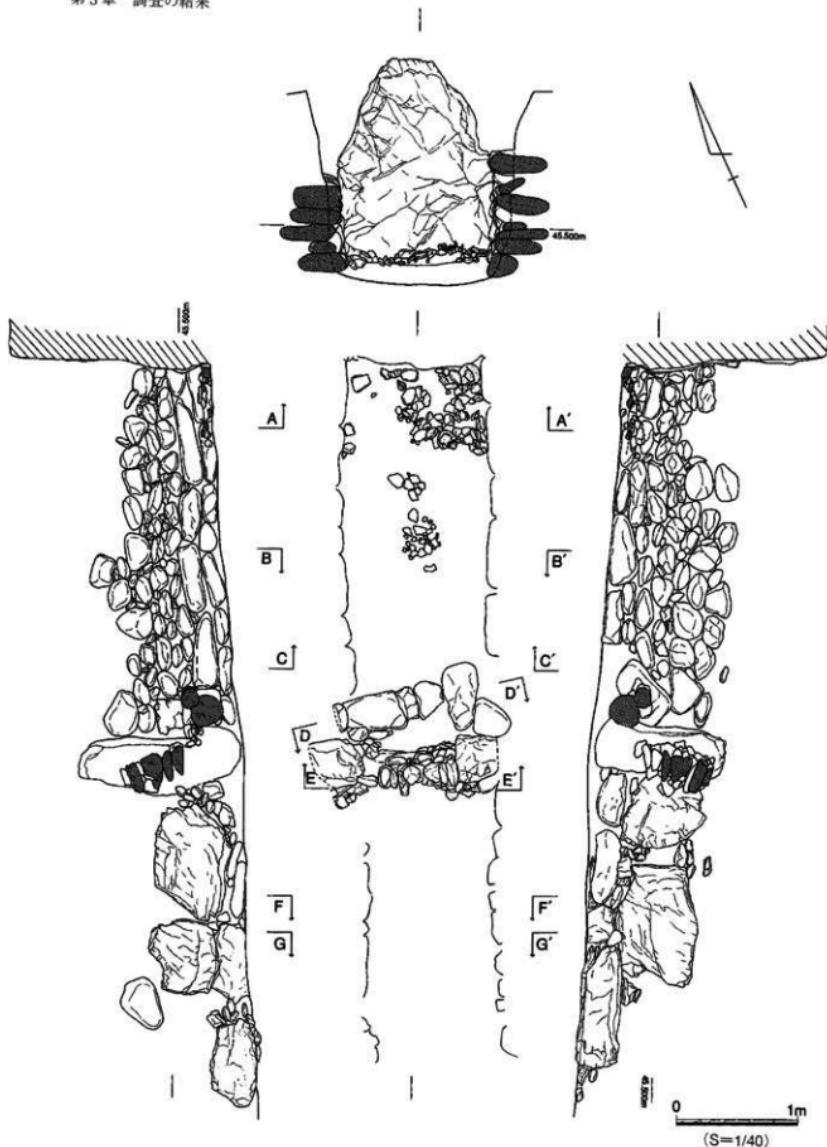
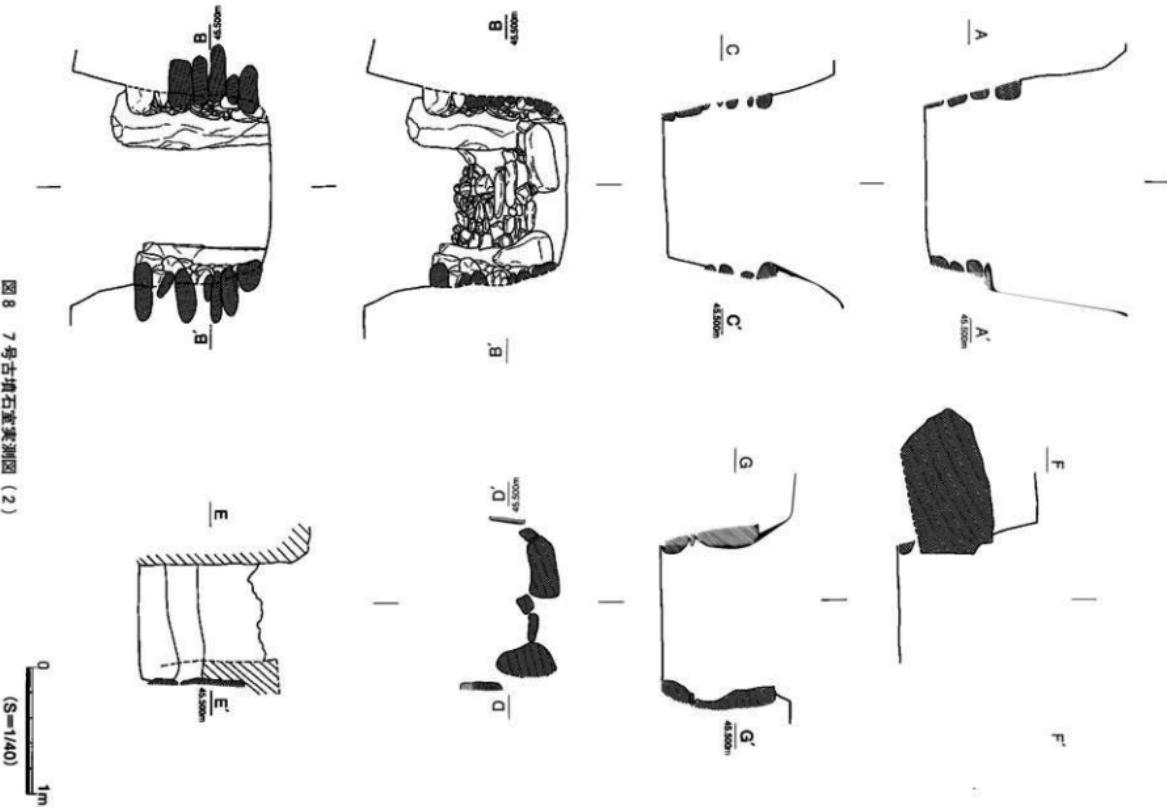


図7 7号古墳石室実測図(1)

第3節 7号古墳

図8 7号古墳石室測量図(2)



第3章 調査の結果

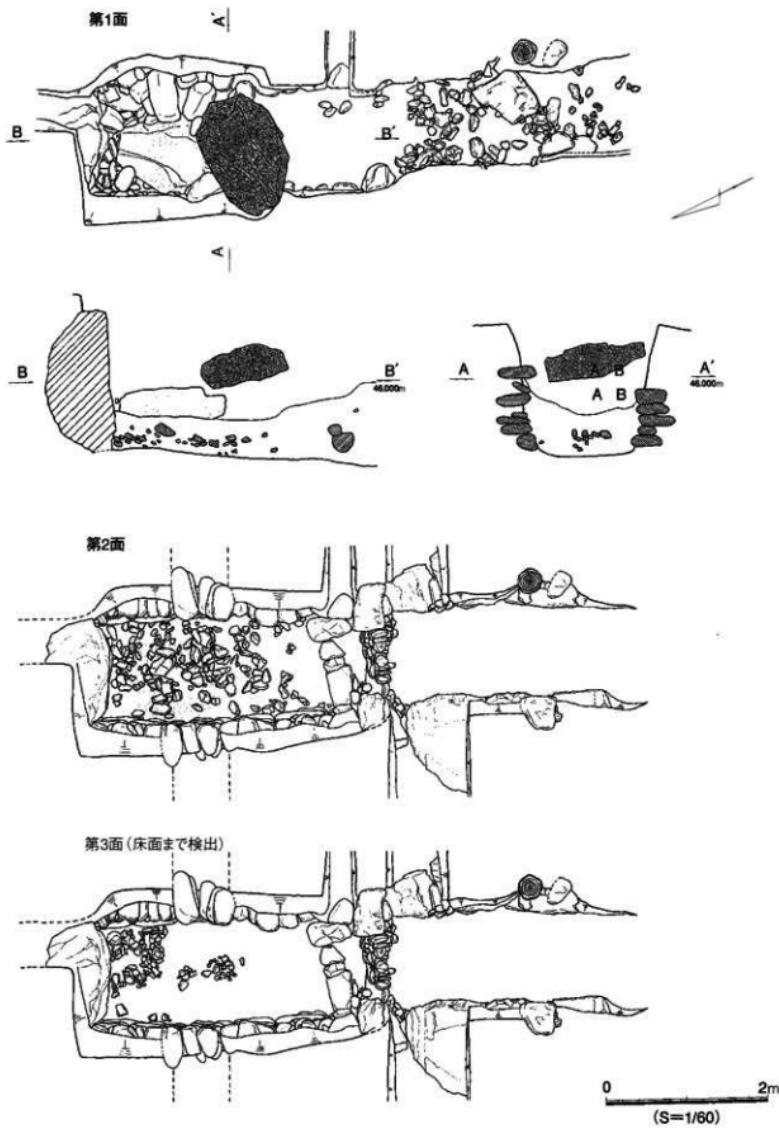


図9 7号古墳側壁石・天井石の崩落状況

4 周溝

墳丘の北側～両側方において周溝を確認した。斜面下方に向かうにつれ浅くなり消失し、石室正面では確認できなかった。確認した周溝は幅約7～8m、最も深い箇所で深さ約0.8mである。周溝内からは土器片が出土している。

5 列石遺構

石室の前庭部において列石遺構を確認している。拳大の川原石・チャートが多く敷き詰められているが、残存状況は悪く、様相は不明である。また、並んでいるチャートの中には斜面上方から流れ落ちてきたもの（人為ではないもの）も多数含まれていると考えている。墳裾の南東方向では外護列石を確認した。川原石とチャートにより構築されているが残存しているのは2mとわずかの範囲であり、全貌は不明である。

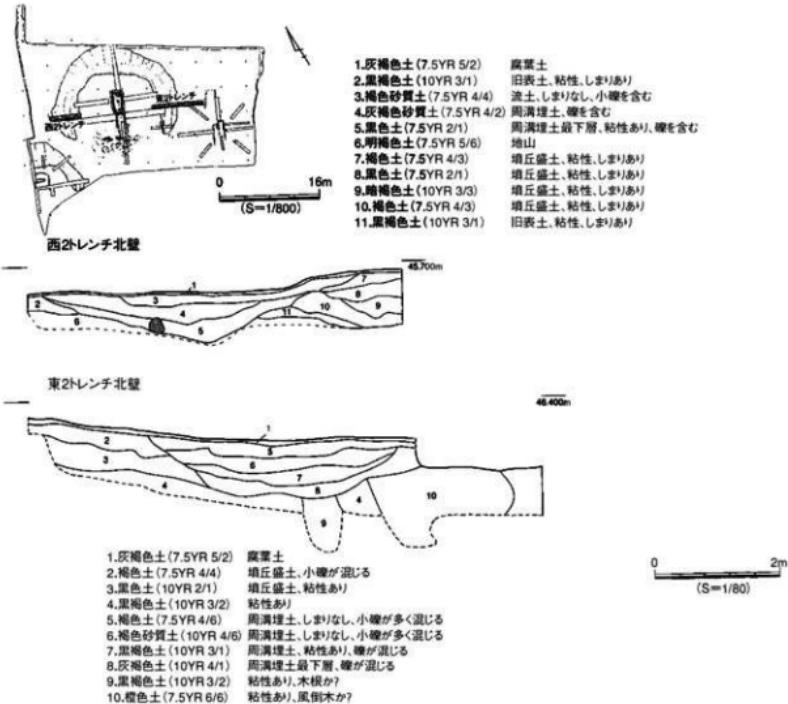


図10 7号古墳周溝断面図

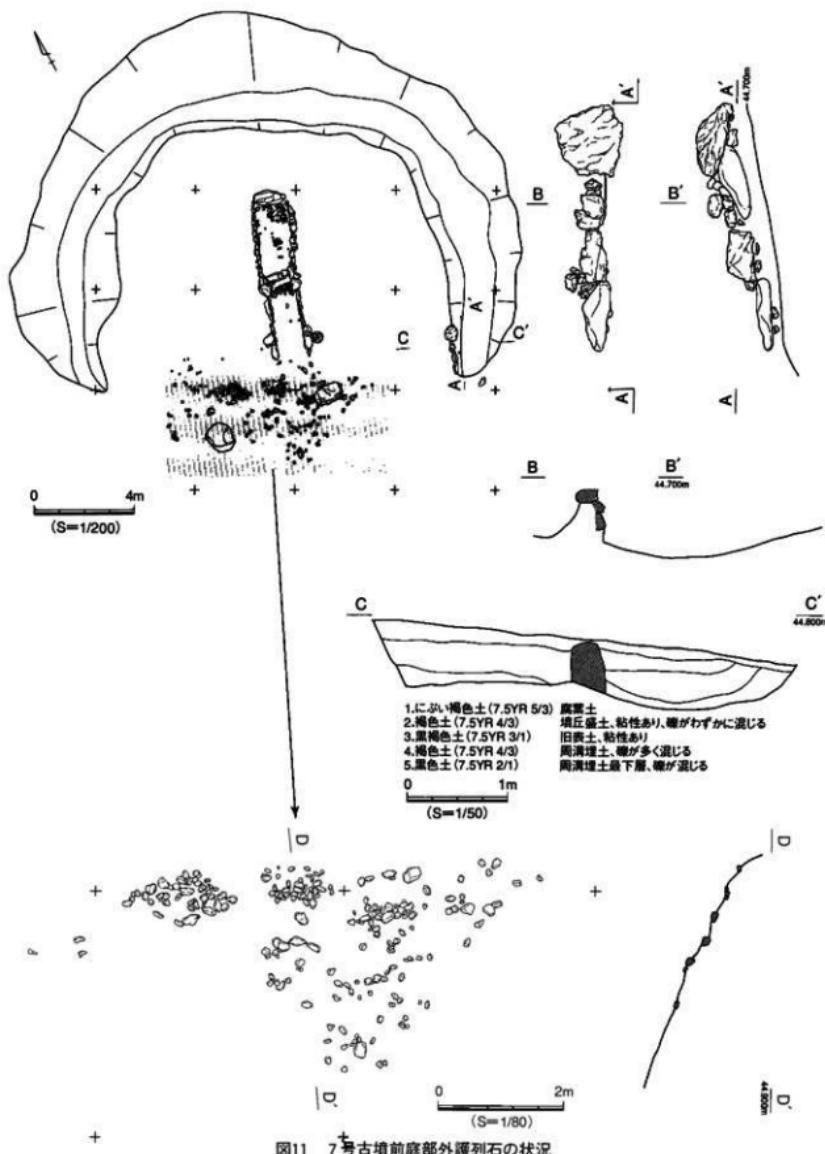


図11 7号古墳前庭部外護列石の状況

6 出土遺物

(1) 遺物の出土状況（図13）

7号古墳の石室は開口している状態であったため、出入りが可能で後世の搅乱を受けている。そのため、石室内堆積土から出土した破片と羨道内堆積土から出土した破片が接合関係をもつなど、原位置を保っていないものが殆どである。ただし、崩落し床面に圧着した天井石の北側は、後世の搅乱を受けることがなくほぼ原位置を保っている可能性が高い。

(2) 出土遺物点数

7号古墳からは、接合前の破片数で須恵器98点、土師器79点、石器1点、合計178点、接合後の破片数で須恵器55点、土師器41点、石器1点、合計97点が出土した。接合後の破片数の内訳は、須恵器が壊類31点、高坏19点、長頸壺2点、平瓶3点、土師器が壺34点、鍋5点、不明2点、石器は剥片1点である。

(3) 出土遺物の説明

1～8は須恵器壊蓋である。1・2を除いて焼成があまく、灰白色～暗灰色を呈する。1は天井部外面下方まで回転ヘラ削りを施しているが、2～8の天井部が残っている破片の外面調整は、いずれも回転ナデである。

9～11は須恵器平瓶である。9と10は口頭部の破片だが、調整や色調、自然釉の降灰状況からみて11と同一個体の可能性が高い。11は底部外面中央付近には弧状に指圧痕が巡り、それに対応する底部内面はやや盛り上がっている。体部外面上方はカキメ調整がなされ、頸部と体部の接合部内面は板ナデが施されている。

12・13は須恵器長頸壺である。12は口縁部がわずかに内湾し、端部は尖り気味に仕上げられている。13の脚端部は約半周が細かく打ち欠かれ、接地面は平坦である。また、脚部外面中程には一条の突帯を有する。体部は中程に最大径を有し、外面に2条の沈線が巡る。

14～16は須恵器高坏の脚端部である。団化した破片以外にも高坏の脚部破片が出土しており、いずれも焼成があまく、灰白色～暗灰色を呈する。脚端部は強いナデにより屈折し、接地面は尖る。

17は土師器鍋である。底部から体部下方は丸く、体部上方はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は外反し、端部は明瞭な面取りが施されている。口縁部を除いてハケ調整がなされ、器面に煤などの付着物はみられない。

18・19は土師器甕である。周溝から出土した土器はこの2点のみであり、いずれも遺存状況は悪い。

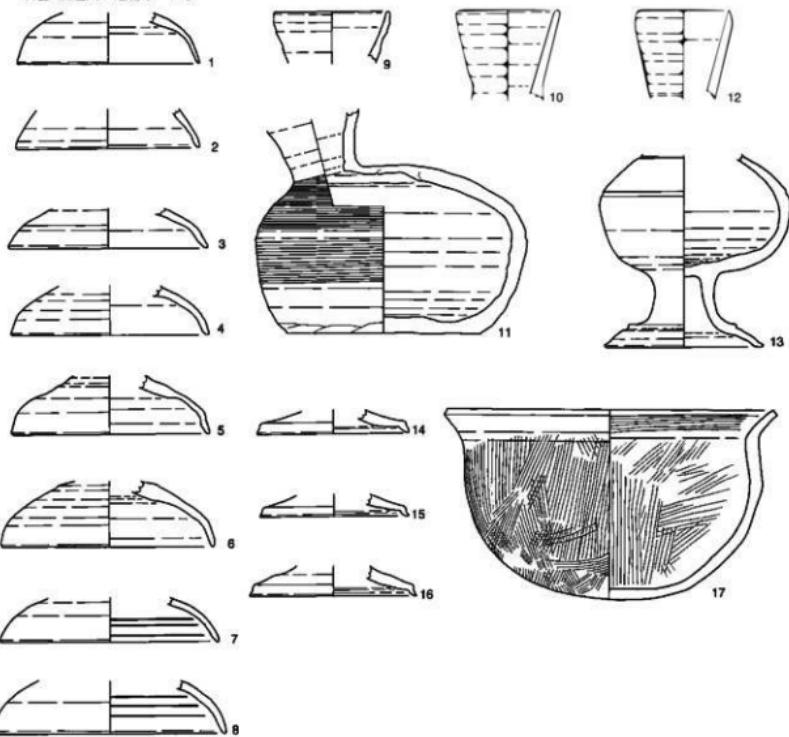
20は瀬戸美濃（連房）の土瓶である。7号古墳の石室東側の墳丘より出土した。いわゆる糸目土瓶で、体部外面上方に平行沈線が多数施されている。底部外面は露地で、煤が付着している。耳部には直径8mmの穿孔があり、上端には刻みが8箇所施されている。

なお、7号古墳の開口部付近で寛永通寶を1枚採集している。

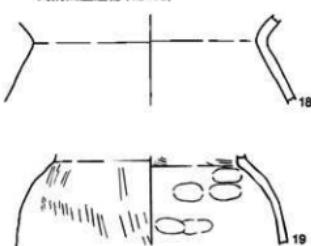
須恵器のうち、焼成が良好な遺物は美濃須衛産、不良なものは美濃で焼成された畿内系須恵器である。時期はいずれも7世紀中頃であることから、7号古墳の時期は7世紀中頃といえる。

第3章 調査の結果

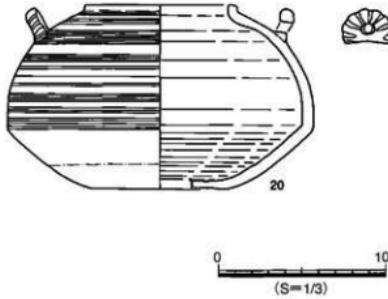
石室・狹道出土遺物(1~17)



周溝出土遺物(18~19)



埴丘出土遺物(20)



0 10m
(S=1/3)

図12 7号古墳出土遺物実測図

表2 7号古墳出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 厚さ	調整	胎土	焼成	色調	口径 底径 厚さX/12	備考	実面 参考	神面	目録
1	7号 周道	4E	堆積土	須恵器 环蓋	(11.0) — —	口縁部～天井部外側 下方回転ナゲ、天井部 側面、天井部内面回 転ナゲ	直径1～2 mmの白色 絹をわずかに含む。 砂質。	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	1.6	美濃須南産	16	12	10
2	7号 石室	4E	床直上	須恵器 环蓋	(11.0) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1 mmの白 色絹をわずかに含 む。砂質。	良好	灰白色 (5Y8/1)	3.8	美濃須南産	13	12	10
3	7号 石室	4E	床直上	須恵器 环蓋	(11.9) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	2.0	畿内系	8	12	10
4	7号 石室	4E	床直上	須恵器 环蓋	(12.0) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.0	畿内系	7	12	10
5	7号 石室	4E	堆積土 床直上	須恵器 环蓋	12.0 — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1～2 mm の白色、灰色絹をわ ざかに含む。砂質。	不良	灰白色 (5Y8/1)	12.0	畿内系	3	12	10
6	7号 石室	4E	床直上	須恵器 环蓋	(12.9) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1～2 mm の白色、灰色絹をわ ざかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	4.5	畿内系。外面に あばた状の盛み がある。	4	12	10
7	7号 石室	4E	床直上	須恵器 环蓋	(13.2) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.6	畿内系。外面に 沈線状の盛みが ある。	9	12	10
8	7号 石室	4E	堆積土	須恵器 环蓋	(14.0) — —	口縁部～天井部内外 側面回転ナゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.6	畿内系。外面に 沈線状の盛みが ある。9と同一 個体の可能性あり。	11	12	10
9	7号 石室	4E	床直上	須恵器 平版	(6.2) — —	口縁部内外面回転ナ ゲ	やや粗、径1 mmの白 色絹をわざかに含 む。砂質。	良好	浅黃褐色 (30YR8/3)	2.8	美濃須南産。内 面に自然輪降灰。 1と同一個 体か。	12	12	10
10	7号 石室	4E	堆積土	須恵器 平版	(12.2) — —	口縁部内外面回転ナ ゲ	やや粗、径1 mmの白 色絹をわざかに含 む。砂質。	良好	浅黃褐色 (30YR8/3)	2.4	美濃須南産。内 面に自然輪降灰。 1と同一個 体か。	5	12	10
11	7号 石室	4E	堆積土 床直上	須恵器 平版	— 11.5 —	底部外表面指印痕、 底部外表面下方回転板 ナゲ、上方カキ方 、底部内面回転ナゲ	やや粗、径1～2 mm の白色、灰色絹をわ ざかに含む。砂質。	良好	浅黃褐色 (30YR8/3)	—	美濃須南産。体 部外表面と底部内 面に自然輪降灰。 胴径16.4cm	1	12	10
12	7号 周道	4E	堆積土	須恵器 長縫蓋	(5.8) — —	口縁部内外面回転ナ ゲ	直径1 mmの白色絹を わざかに含む。砂質。	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	6.0	美濃須南産。外 面に自然輪降灰。 2と同一個 体か。	17	12	10
13	7号 石室	4E	堆積土 床直上	須恵器 長縫蓋	(9.5) — —	脚部内外面回転ナ ゲ、体部外表面下部 約1/2削り、体部外 表面内面～内面回転ナ ゲ	やや粗、径1～2 mm の白色、灰色絹をわ ざかに含む。砂質。	良好	黄褐色 (2.5Y6/1)	—	美濃須南産。体 部内外面と脚部 外表面に自然輪降 灰。胴径11.2cm	2	12	10
14	7号 石室	4E	堆積土 床直上	須恵器 高坏	(9.1) — —	脚部内外面回転ナ ゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	—	畿内系	22	12	10
15	7号 石室	4E	床直上	須恵器 高坏	(9.0) — —	脚部内外面回転ナ ゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	—	畿内系	14	12	10
16	7号 石室	4E	堆積土	須恵器 高坏	— —	脚部内外面回転ナ ゲ	やや粗、径1 mmの白 色、灰色絹をわざか に含む。砂質。	不良	浅黃色 (2.5Y8/3)	—	畿内系	6	12	10
17	7号 石室	4E	床直上	土器器 鍋	19.9 — —	底部～体部外表面 斜めハケ、口縁部外 面回転ナゲ、口縁部内 面斜めハケ、体部内 面斜めハケ	直径1 mmの白色絹を わざかに含む。	良好	褐色 (7.5YR7/6)	8.3	—	15	12	10
18	7号 周溝	2E	最下層	土器器 甕	— — —	脚部内外面回転ナ ゲ、体部内面指印痕	直径1～2 mmの白 色、灰色、赤色絹を わざかに含む。	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	—	—	19	12	10
19	7号 周溝	2F	最下層	土器器 甕	— — —	体部内外面回転ナ ゲ、内面 斜めハケ、体部内面横 方向の指印痕	直径1～3 mmの白 色、灰色、赤色絹を わざかに含む。	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	—	—	18	12	10
20	7号 墳丘	4E 5G	表土	織戸 美濃土 甕	9.0 (8.0) 11.0	底部外表面削り～底 部内面回転ナゲ	直径1 mmの白色絹を わざかに含む。	良好	にぼい褐色 (7.5YR7/3)	6.5	いわゆる奈良土 底部外表面と 口縁部削りを除く て踏跡が施される。	21	12	10

※注釈の()は推定値を示す

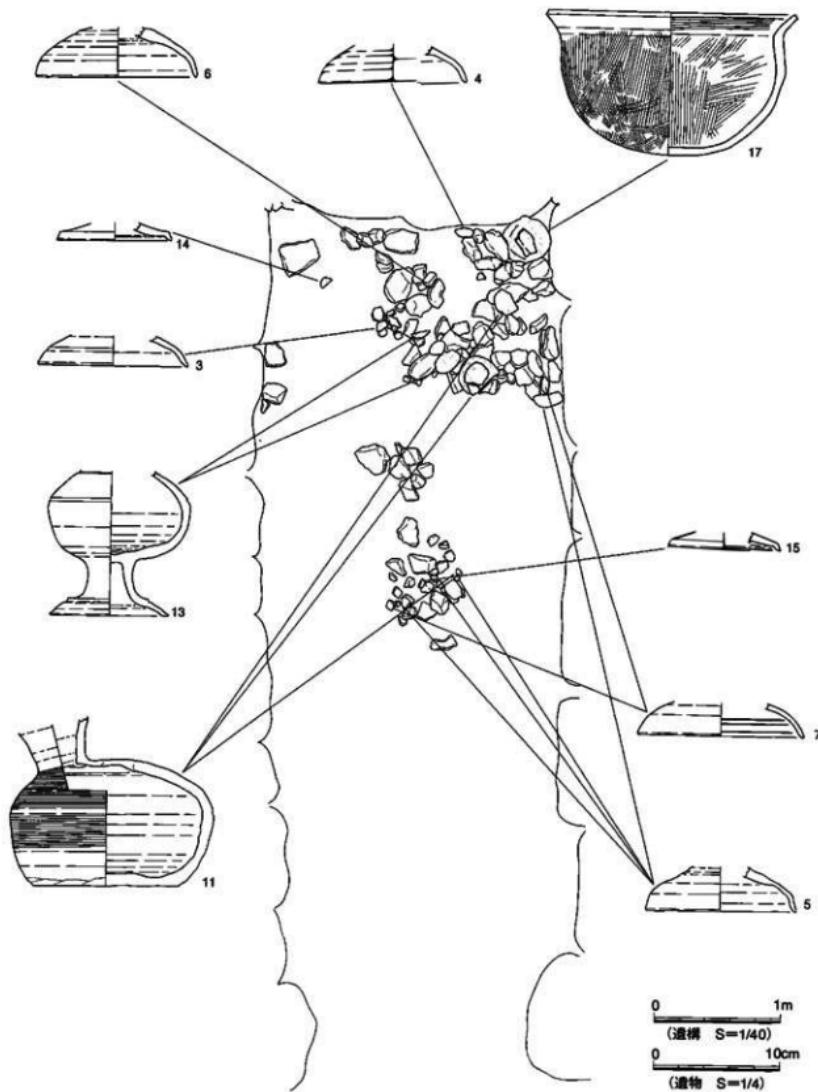


図13 7号古墳石室内遺物出土状況

第4節 10号古墳（図14～16）

1 概要

10号古墳は調査区の東方に位置し、北西方向の7号古墳とは約17m離れている。トレンチ調査において周溝が検出できなかったため、規模は不明である。調査前の地形は起伏の目立った変化はないが、試掘確認調査で川原石の側壁を検出し、その存在が判明した古墳である。7号古墳と比較すると規模は小さいが、チャートと川原石で構築された横穴式石室をもつ。また、石室内において遺物の出土は確認できなかった。

10号古墳床面の検出の途中で、石室北側にチャートと川原石からなる南北約128cm、東西約68cm、高さ約40cmの土盛りを検出した。側壁などが崩壊して積み重なったものか、意図して築造したもののかは不明である。

2 墳丘

墳形は不明である。墳丘の構築状況は、傾斜地形を利用して石室の基底部（旧表土・地山）を掘り込んで石室を構築した後、玄室床面の盛土・整地をしている。墳丘断面の土層から石室の奥壁・側壁を構築し、背後の裏込めを行い、その後に墳丘を造るための盛土をしていることを確認した。しかし、墳丘の盛土の大部分は流れ落ちてしまっており、残存状況は非常に悪い。

3 内部主体

南南東に開口する横穴式石室で、主軸はN-24°-Wである。玄室は長さ1.8m、幅約0.6mである。奥壁はチャート（高さ80cm・幅46cm・厚さ約15cm）とその上に川原石・チャートを積み重ねており、不安定な状態である。玄室の側壁は川原石を積み重ねて構築されている。山の斜面を地山部分まで削り、土を入れて整地をした後、1段目は楕円形の川原石の長辺を南北に並べて置き、2段目では楕円形の川原石の長辺を東西に並べて構築している。奥壁の高さは1m、側壁は残存状況の良い箇所で0.8mある。

床面については、玄室内全体に礫床が残存していた。7号古墳と同様に10cm程度のチャートを雜に並べてあり、これを礫床と判断した。搅乱等の痕跡はないが、石室内において出土遺物は確認できなかった。また、断ち割りの結果、床面の構築は1回のみと判断した。

玄門石は置かれておらず、天井石は確認できなかった。また、羨道部も確認できなかった。

4 周溝

石室を中心として放射状に合計8本のトレンチを入れたが、周溝や外護列石は確認できなかった。調査前の地形をみても古墳特有の盛り上がった地形は確認できず、傾斜地であるために土砂の流出・堆積などにより、当時の墳形は変化してしまっていると考えられる。

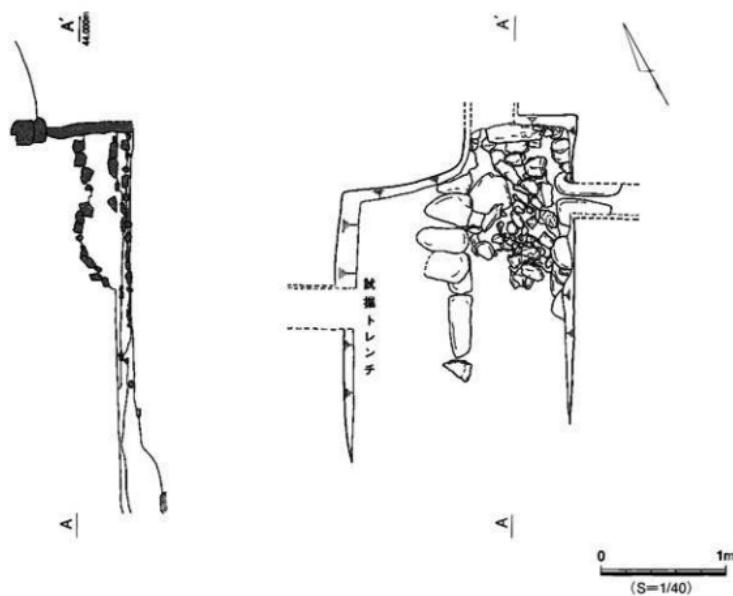
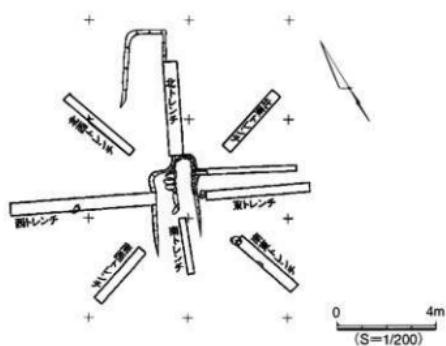


図14 10号古墳石室内石組み出土状況

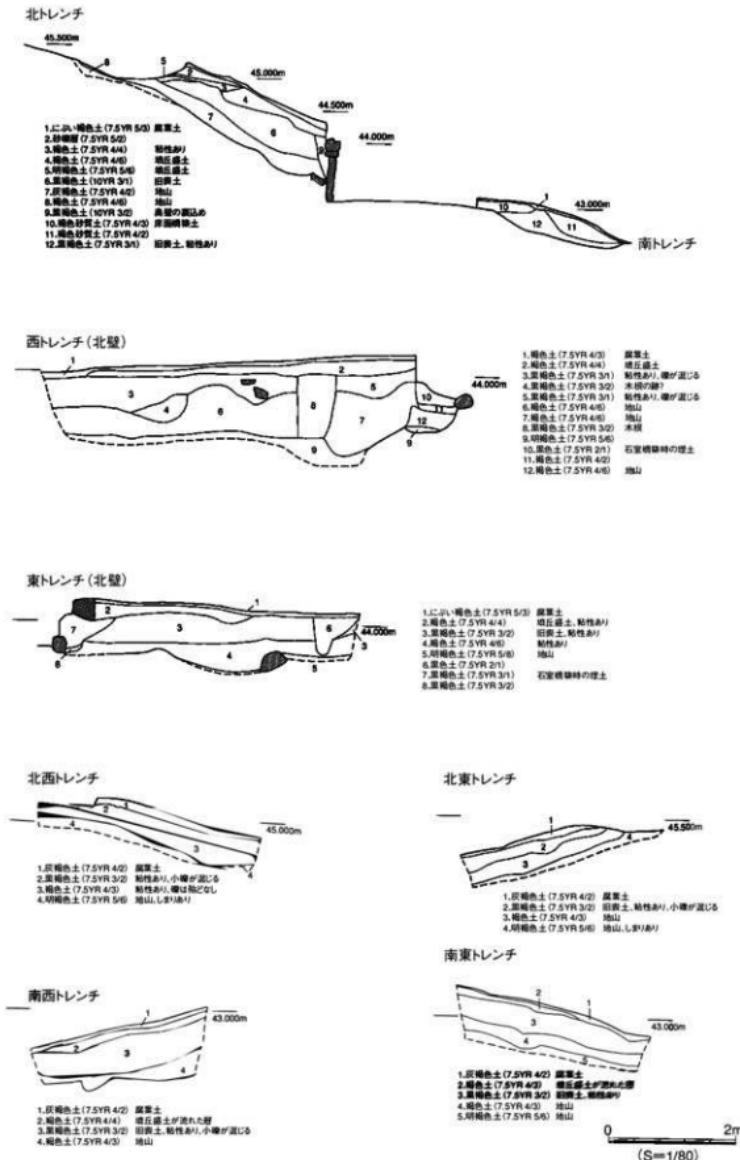


図15 10号古墳埴丘断面図

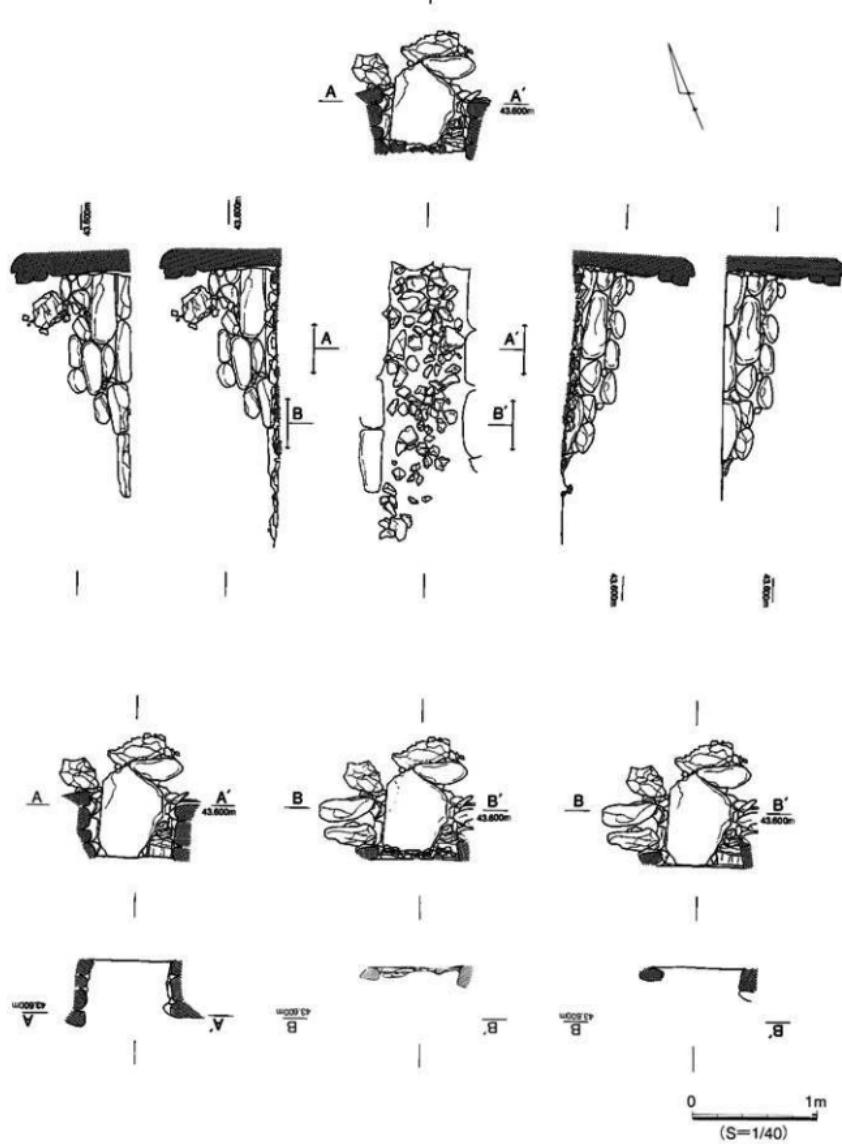


図16 10号古墳石室実測図

第5節 11号古墳（図17～22）

1 概要

11号古墳は試掘確認調査において周溝を検出し、その存在が明らかになった。調査区の西方に位置し、北東方向の7号古墳とは約18m離れている。木棺直葬の古墳であり、横穴式石室をもつ7号古墳とは築造された時期が異なる。11号古墳は西方に隣接する清水八幡神社の境内にまたがり、調査対象区域には周溝と墳丘の一部しかないため、全体は不明である。遺物は墓坑・周溝から出土している。

2 墳丘

盛土により墳丘を構築し、旧表土・地山部分を掘削して墓坑を設置し、埋葬後盛土をしている。

3 内部主体

11号古墳では、東方に位置する横穴式石室をもつ7・10号古墳とは異なり、木棺を直葬した墓坑を確認した。調査区内の墳丘中央部において東西2.7m、南北1.6mにわたり、細長い窪みが掘り込まれ、西方は調査区外（清水八幡神社）に続いている。また、墓坑の南側の一部は調査開始時に入れた東トレントにより消失してしまった。

墳丘と墓坑の境界については土色が酷似しており、識別が困難であった。土色が黄～茶褐色土の長方形のプラン（調査区内においては東西1.8m、南北0.4m）を検出しているが、これは腐食し消失した木棺の跡と考えている。15cm程度の縫（チャート）が木棺跡の検出ラインの外側を廻っている様子から、木棺を石を用いて固定し、裏込めとしているといえる。

墓坑の東側には粘土塊が設置してある。粘土塊には長さ約15cm、幅約10cm、厚さ3～4cmの形状の整ったチャートが含まれていた。東トレント掘削時にも同様の粘土塊を確認したため、粘土塊についてはさらに南方に続いていたことがわかる。粘土塊はその上に遺物（提瓶・小型壺）が置かれており、遺物の出土レベルは床面よりも高い。この粘土塊は棺の固定に使用されたものと考えている。

墓坑内においてはベンガラを確認している（図19下）。その分析については第4章に掲載した。

4 周溝

周溝は旧表土・地山部分まで掘削しており、墳丘の北側～東側において確認した。西側（調査区外）にも周溝が続いており、南側は斜面下方に向かうにつれ浅くなり消失する。調査区南方境は工事のために斜面が削り取られているため詳細は不明であるが、周溝は墳丘南面まで巡らないと考えている。確認した周溝は幅約2～4m、最も深い箇所で深さ約0.8mである。周溝内からは土師器片・須恵器片が出土している。

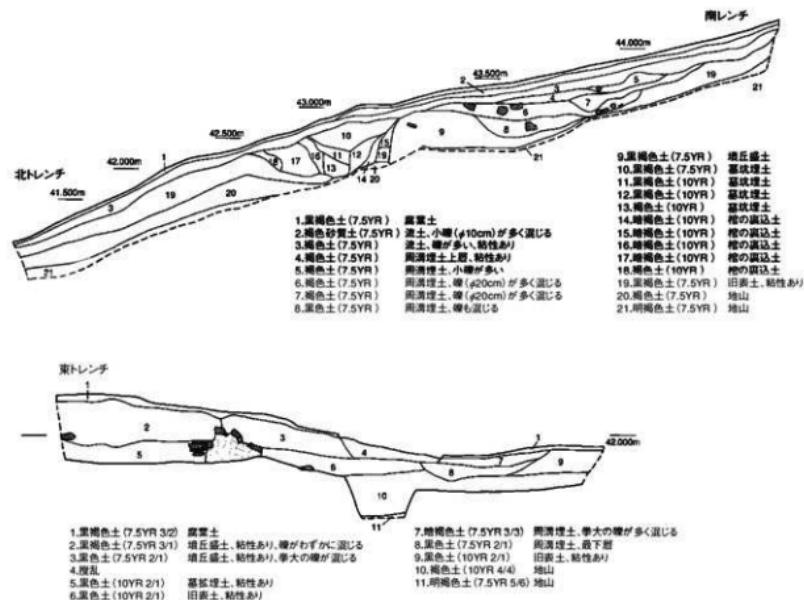


図17 11号古墳墳丘断面図

0 4m
(S=1/80)

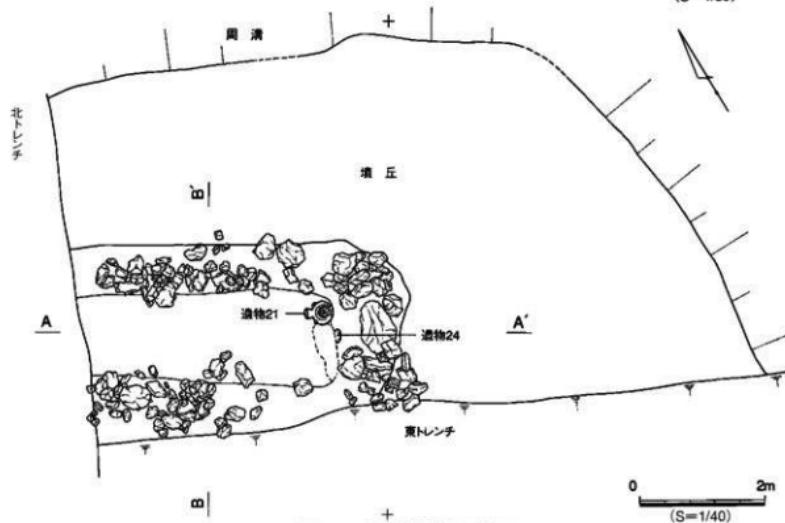
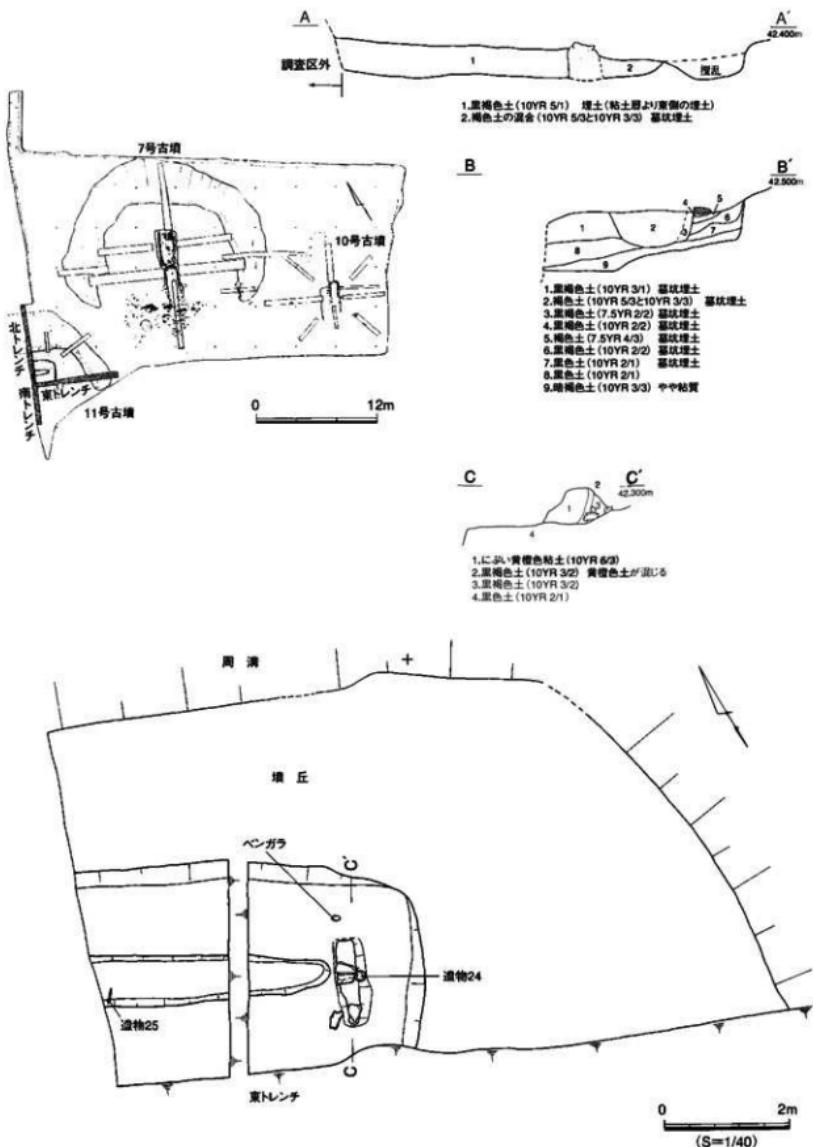


図18 11号古墳墓坑検出状況

図19 11号古墳⁺墓坑完掘状況

5 出土遺物

(1) 遺物の出土状況 (図22)

墓坑からは、原位置を保っていると思われる位置で須恵器提瓶と土師器壺が出土した。また、周溝の埋土の最下層から須恵器高坏や土師器壺が出土している。

(2) 出土遺物点数

11号古墳からは、接合前の破片数で須恵器16点、土師器54点、金属製品1点、合計71点、接合後の破片数で須恵器14点、土師器14点、金属製品1点、合計29点が出土した。接合後の破片数の内訳は、須恵器が壺類10点、高坏3点、提瓶1点、土師器が壺13点、壺1点、金属製品は鉄鎌1点である。

(3) 出土遺物の説明

21は須恵器提瓶である。ほぼ完形であり、棺外小口の粘土塊の上より出土した。背面、腹面、及び口頭部外面はカキメ調整がなされ、背面には放射状のヘラ書き文がわずかにみられる。肩部には一対の環状把手が付き、その表面はヘラ状工具で丁寧に面取りされている。口縁部は受け口状を呈し、端部は丸く仕上げられている。

22は須恵器高坏である。脚部外面に一条の低い突帯が巡り、端部は尖る。脚柱部の透しの底辺がわずかに確認できる。

23は須恵器壺蓋である。受部は鋭く外側に引き出され、その端部は尖る。

24は土師器壺である。完形であり、21と同じく棺外小口の粘土塊の上より出土した。底部外面には木葉痕が残り、体部内面下方には絞り込み痕が顕著に残る。

25は鉄鎌である。棺内の床面直上より出土した。鎌身部が欠落している。

26・27は須恵器高坏である。26は全体的に暗灰色～黒色を呈し、胎土中に白色粘土が筋状に入る。脚裾部には一条の突帯が巡る。27の胎土は26より砂質で、白色粘土はみられない。

28は須恵器壺蓋である。内面はすべて剥落しているが、受け部は鋭く、口縁部はわずかに外側に開く。胎土中に白色粘土が筋状に入る。

29は須恵器高坏蓋としたが、高坏の坏部の可能性もある。

30・31は土師器壺である。31は図22に示したように、脚部と体部の出土位置がやや離れているが、胎土や全体の器形から同一個体と判断した。脚部の器壁は厚く、端部は平坦面を有する。体部内面には細かいハケ調整、外面には粗いハケ調整がなされ、口縁端部はわずかに外側に突出する。なお、外面中程に煤が付着しているが、内面には煤がみられない。

32・33は須恵器壺蓋である。32はトレント掘削において出土し、33は11号古墳の墳丘上の表面採集資料である。32の受け部は鋭く、天井部外面上方は回転ヘラ削りが施されている。33は高坏の坏部の可能性もある。

34は須恵器壺身である。11号古墳の墳丘上の表面採集資料である。

須恵器の産地と時期は、23・28・32が猿投産で5世紀末～6世紀初頭、21・22・26・27・29・33が畿内系で6世紀末～7世紀初頭、34が美濃須衛産で8世紀中頃である。古墳の時期は2通りの解釈ができる。一つは5世紀末～6世紀初頭に木棺直葬墓が構築され、6世紀末～7世紀初頭に再利用したという考え方で、もう一つは6世紀末～7世紀初頭に木棺直葬墓が構築され、それ以前の遺物は混入とする考え方である。調査結果から、どちらが妥当か判断できなかった。

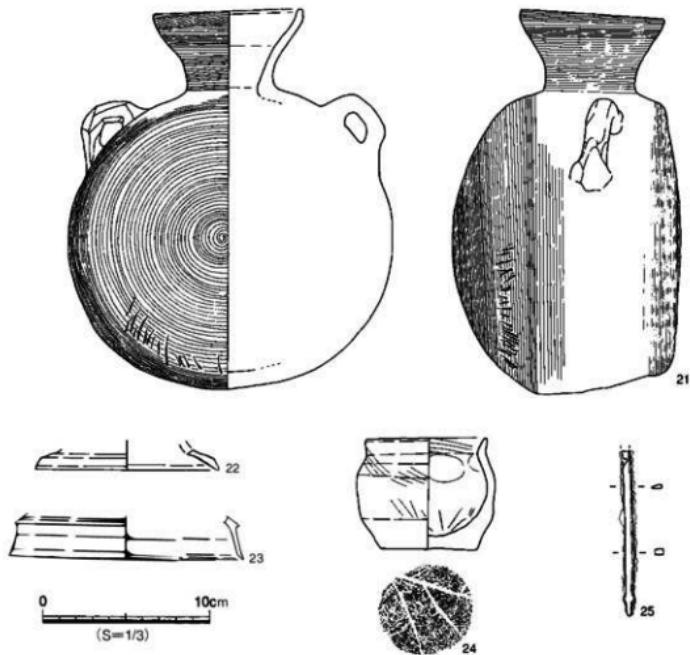


図20 11号古墳出土遺物実測図（1）

表3 11号古墳出土遺物観察表（1）

掲載番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 高さ 器高	調整	粘土	焼成	色調	口縁 残存 X/12	備考	実測番号	神因	回収
21	11号 墓坑	7B	粘土 塊	須恵器 鏡	8.8 - 23.2	背面と腹面、及び 頭部外側カキメ、口 部内面回転ナダ	直径1-2 mmの白色 粒をわずかに含む。 砂質。	良好	灰色 (N4/0)	12.0	鏡内系か鏡投 底。頭部に一对 の環状把手。背 面にヘラ模様 文。外面に自然 陶灰。6cm後 半-7cm初。	30	20	11
22	11号 墓坑	7B	埋土	須恵器 高环	- -	脚部内外面回転ナダ	やや粗。径1-2 mm の白色、灰色粒をわ ずかに含む。	良好	灰白色 (7.5Y7/1)		鏡内系。脚柱部 に穿孔あり。6 cm末-7cm初。	32	20	11
23	11号 墓坑	7B	埋土	須恵器 环底	14.0 - -	口縁部内外面回転ナ ダ、天井部外側斜め ヘラ削り	やや粗。径1 mm以下 の白色粒をわずかに 含む。白い粘土が筋 状に入る。	良好	灰色 (N4/0)	1.2	鏡投底。 5cm末-6cm初。	33	20	11
24	11号 墓坑	7B	粘土 塊	土師器 壺	7.2 5.2 6.7	底部外側木葉裏、体 部外側斜めハケ、口 部外側横ナダ、内 面横ハケ、体部内面 削痕	粗。径3 mm以下の白 色、灰色、褐色粒を やや多く含む。繊維 状の植物遺体もみら れる。	良好	浅黄褐色 (10Y8/4)	12.0	体部内面下方に 絞り込み痕あり。 ほぼ完形。	34	20	11
25	11号 墓坑	7B	埋土	鐵錠	長29.9cm 幅0.5cm 厚さ0.3cm						上部欠損	35	20	11

※法量の（ ）は推定値を示す

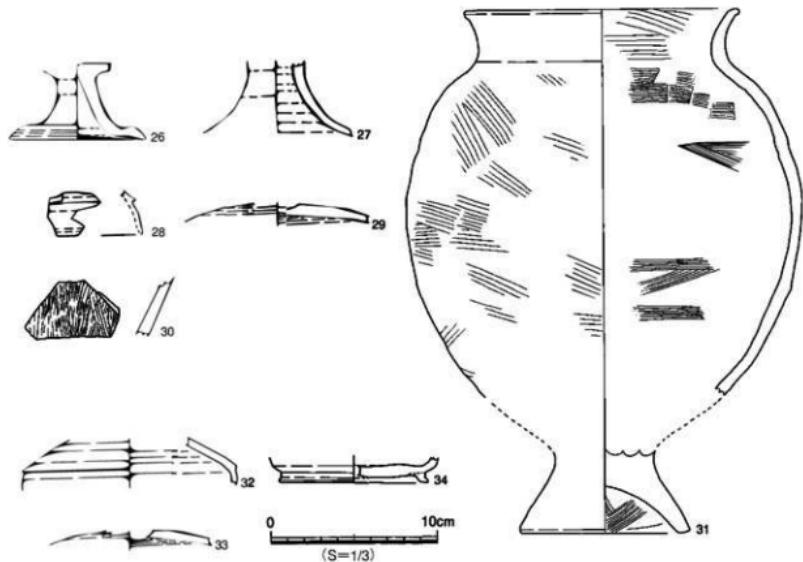


図21 11号古墳出土遺物実測図（2）

表4 11号古墳出土遺物観察表（2）

機械番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 高さ	調整	粘土	焼成	色調	口縁 残存 率/X/12	備考	実測 番号	辨別	国版
26	11号 周溝	6B	最下層	須恵器 高環	- 8.2	脚部～坏部内外面回転ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色粒をわずかに含む。 白い粘土が筋状に入る。	良好	灰褐色 (NS/1)	焼内系。外面に 自然釉陶灰。6 cm×7cm。	36	21	11	
27	11号 周溝	6C	最下層	須恵器 高環	-	脚部外表面板ナダ、内 面回転ナダ	やや粗、径1～2mm の白色、灰色粒をわ ずかに含む。 砂質。	良好	灰褐色 (N4/1)	焼内系。脚部3 穿孔。6cm× 7cm。	37	21	11	
28	11号 周溝	7B	上層	須恵器 环蓋	-	口縁部～天井部外面 回転ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色粒をわずかに 含む。 白い粘土が筋 状に入る。	不良	灰白色 (NB/1)	焼成差。内面剥 落。5cm×6cm。 前。	39	21	11	
29	11号 周溝	6B	最下層	須恵器 高環蓋	-	天井部外面回転ヘラ 削り、内面回転ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色粒をわずかに 含む。	良好	黄褐色 (2.5Y5/1)	焼内系。6cm ～7cm。	38	21	11	
30	11号 周溝	7C	最下層	土器器 蓋	-	体部外表面ハケ、内 面回転ナダ	直径1～3mmの白 色、洪色、赤色粒を 幾つか含む。	良好	浅黄褐色 (10YR8/3)		20	21	11	
31	11号 周溝	7C	最下層	土器器 蓋(字裏)	(16.4) 10.2	脚部内面、体部内外 面・口縁部内面横 斜めハケ、脚部外面 指圧痕、口縫部外 面横ナダ	粗、径3mm以下の白 色粒を含む。 白い粘土が筋 状に入る。	良好	灰白色 (2.5Y8/2)	焼成差。体部外 面に塗付 有。	40	21	11	
32	11号	7B	北トレ ンチ	須恵器 环蓋	-	天井部外面上方回転 ヘラ削り、他は回転 ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色粒をわずかに 含む。 白い粘土が筋 状に入る。	不良	灰褐色 (2.5Y6/2)	焼成差。受部幅 13.0cm。5cm ～6cm。	51	21	11	
33	11号	7C	表土	須恵器 环蓋	-	天井部外面回転ヘラ 削り、高台周辺～体部 内面回転ナダ、底 部内面墨跡指ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色、灰色粒をわ ずかに含む。	良好	黄褐色 (2.5Y5/1)	焼内系。6cm ～7cm。	52	21	11	
34	11号	7C	表土	須恵器 环身	(9.0)	底部外面回転ヘラ削 り、高台周辺～体部 内面回転ナダ、底 部内面墨跡指ナダ	やや粗、径1mm以下 の白色、灰色粒をわ ずかに含む。	良好	灰褐色 (NS/1)	美濃須南施。8 cm。	50	21	11	

※法量の（ ）は推定値を示す

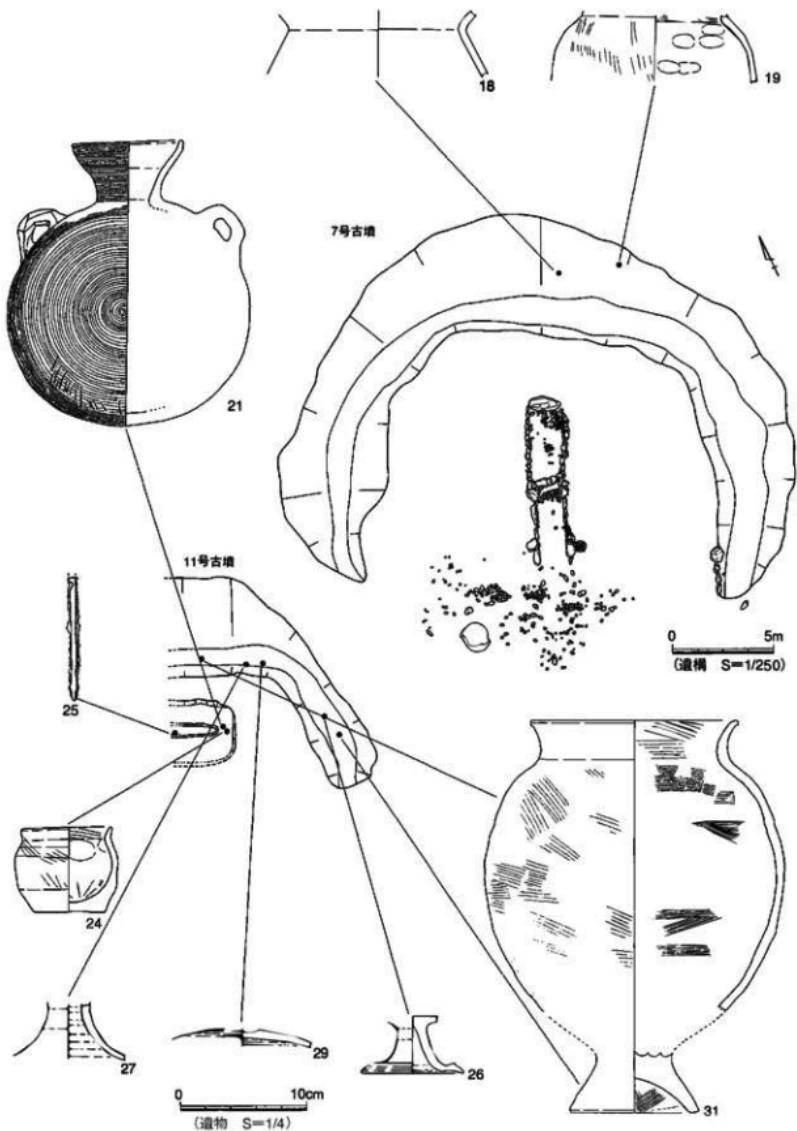


図22 11号古墳周溝・墓坑、7号古墳周溝遺物出土状況

第4章 自然科学分析

土師器・粘土塊・赤色顔料の分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

7号古墳からは、埋納した土師器や灰オリーブ色(7.5Y 6/2)の粘土塊が検出された。また、隣接する床面からは、赤色顔料が塊状で検出された。

ここでは、土師器の材料、粘土の化学組成、赤色顔料の成分について検討した。

2 試料と方法

以下では、1. 土師器の胎土材料、2. 粘土塊の化学組成、3. 赤色顔料の成分の各項目についてそれぞれ述べる。

〔土師器の胎土材料〕

試料は、7号古墳から出土した土師器片である。

この土師器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機及びガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

土師器薄片は、薄片全面について微化石類(珪藻化石、骨針化石、胞子化石)や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは表5の通りである。

〔粘土塊の化学組成〕

粘土塊は、恒温乾燥機内で80°C、24時間乾燥した。その後、電気炉を用いて750°C、3時間で焼成し、強熱減量試験を行った。

これら粉末は、乳鉢で粉末にした後、塩化ビニール製リングに充填して20t加圧して成型した。測定は、㈱パナリティカル社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いて検量線法による定量分析を行った。測定元素は主成分元素(Na₂O、MgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、K²O、CaO、TiO₂、MnO、Fe₂O₃)と微量元素(Rb、Sr)である。

〔赤色顔料の成分分析〕

試料は、現地においてフィルムケースに取り上げられた赤色塊である(図24)。この試料は、シャーレ上に展開し、際立って赤い部分を選んでポイント分析した。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Type IIを用いた。仕様は、X線導管径100 μm 、電圧50KV、電流0.06mA、測定時間200secで行い、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメー法）で半定量分析を行った。

3 結果および考察

[土師器の胎土材料]

ここでは、土師器薄片全面について、偏光顕微鏡を用いて粒子の観察と同定を行った。なお、ここで使用した粒子の分類群については、藤根・今村（2003）を参照されたい。以下に、顕微鏡観察による特徴記載を述べる。

土師器：60～300 μm が多い（最大粒径1.3mm）。石英・長石類）複合石英類（微細）ガラス質）複合石英類、雲母類、单斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、雲母類、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群Melosira granulata、淡水種Eunotia biareofera、Pinnularia属、Eunotia属、Coccconeis placentula、不明種）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

表5に、土師器の観察結果について、粘土の特徴、砂粒の特徴、鉱物の特徴としてまとめた。

当遺跡が立地する地域は、長良川と津保川が合流する西側地域であるが、周辺に形成された段丘堆積物中の砂層の砂粒組成は堆積岩類や流紋岩類あるいは深成岩類と推定される。土師器胎土中の砂粒組成は、堆積岩類主体でありその他深成岩類とテフラであり流紋岩類などが含まれていないことから、隣接地の組成とは直ちに言えない。

一方、淡水種珪藻化石が含まれていたが、これらは珪藻化石の特徴から湖沼あるいは沼澤地などで堆積した粘土であることが分かった。ここで見られる珪藻化石の種類や構成種は、琵琶湖周辺の堆積物では良く見られるが、こうした地域の可能性を考えてみる必要がある。

表5 土師器胎土の粘土及び砂粒の特徴

試験	粘土の特徴							砂粒の特徴							鉱物の特徴							その他の特徴
	分類	種類	放射 虫化石	海水 堆積 珪藻 化石	淡水 堆積 珪藻 化石	不明 種類 珪藻 化石	骨針 化石	孢子 珪酸 体化石	分類	堆積 岩類	混成 岩類	火山 岩類	矽化 岩類	流紋 岩類	片岩 類	チフタ ラ	角閃 石類	輝石 類	ジル コン	イタロ 石類	雲母 類	
土師器	○	淡水成	-	-	+	+	+	+	Cb	++	+	-	-	-	-	+	+	+	++	(+)	+	颗粒質

[粘土塊の化学組成]

表6に、各試料の強熱減量と蛍光X線分析による結果を示す。強熱減量（%）は、乾燥重量に対する強熱重量の百分率として示し、主に粘土中に含まれる有機物量および結合水量や結晶水量の目安である。この強熱減量値は、概ね一般的な粘土と大差ない値を示している。

試料は、肉眼観察においては砂粒分の少ない粘土であった。また、少量を水に溶いて顕微鏡で観察すると珪藻化石や植物珪酸体化石などの微化石類を含まない粘土であった。

分析の結果では、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が約22.76%と高く、酸化ケイ素（SiO₂）が約63.74%と高い。

一般的に、粘土では酸化アルミニウムが高く、砂粒では酸化ケイ素が高い。たとえば、美濃須衛産の山茶碗では、酸化アルミニウムが約17～21%、酸化ケイ素が約71～78%である（藤根、2000）。こう

したことから、比較的粘土分の高い粘土であると言える。

なお、顕微鏡観察により珪藻化石や植物珪酸体化石などの微化石類を含まないことから、段丘堆積物の可能性が考えられる。当遺跡の北側、関市広見一池尻地内あるいは下有知地内の水田地では、低地的景観を呈するものの水田直下には青灰～灰色の厚い粘土層が堆積している。これら粘土層は、数万年前に堆積した段丘成の堆積物と推定されるが、現在瓦の粘土材料として採掘されている。

なお、これら山茶碗と比べて酸化マグネシウムや酸化鉄などが高い値を示している。

表6 粘土塊の化学組成

(化学組成) [主成分元素] Na₂O: 酸化ナトリウム、MgO: 酸化マグネシウム、Al₂O₃: 酸化アルミニウム、SiO₂: 酸化ケイ素、P₂O₅: 酸化リン、K₂O: 酸化カリウム、CaO: 酸化カルシウム、TiO₂: 酸化チタン、MnO: 酸化マンガン、Fe₂O₃: 酸化鉄 [微量元素] Rb: ルビジウム、Sr: ストロンチウム。

No	強熱減量(750℃、3時間)			Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	主成分 の合計	Rb (ppm)	Sr (ppm)
	強熱減量	乾燥重量	強熱重量	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)			
粘土	4.03	3.76	6.70	0.18	1.78	22.76	63.74	0.040	3.39	0.01	1.13	0.020	4.23	97.28	293.88	72.56
誤 差				0.29	0.59	0.66	1.05	0.010	0.04	0.06	0.01	0.002	0.30		4.10	55.40

[赤色顔料の成分分析]

分析の結果、赤味の強い部分のポイント分析では、鉄(Fe)が約78.97%含まれていた。その他の元素では、イオウが約2.94%と比較的高い数値を示した。なお、他の赤色成分である水銀(Hg)などは含まれていなかった(図24)。

こうしたことから、この赤色顔料はベンガラである。

ベンガラは、古代のものは鉄に富んだ土、すなわち赤土の類を焼いて作られたものと考えられている(山崎(2002))。また、岡田(1997)は、縄文時代から古墳時代にかけて用いられたパイプ状ベンガラは、珪藻化石が見られたことから、崖端や湧水部や池中に沈殿した糸状体を形成する鉄細菌の生産物を焼成した結果得られたものと推定している。

引用文献

- 藤根 久・今村美智子(2003) 第6節 住居跡・土坑墓出土土器の胎土材料。「深掘前遺跡(第2分冊)」、財団法人岐阜県文化財保護センター、p.34-51。
- 藤根 久(2000) 第3節 山茶碗の蛍光X線分析。「船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡(第2分冊)」、財団法人岐阜県文化財保護センター、p.12-15。
- 岡田文男(1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p.38-39
- 山崎一雄(2002) 古文化財の科学。思文閣出版、p.352

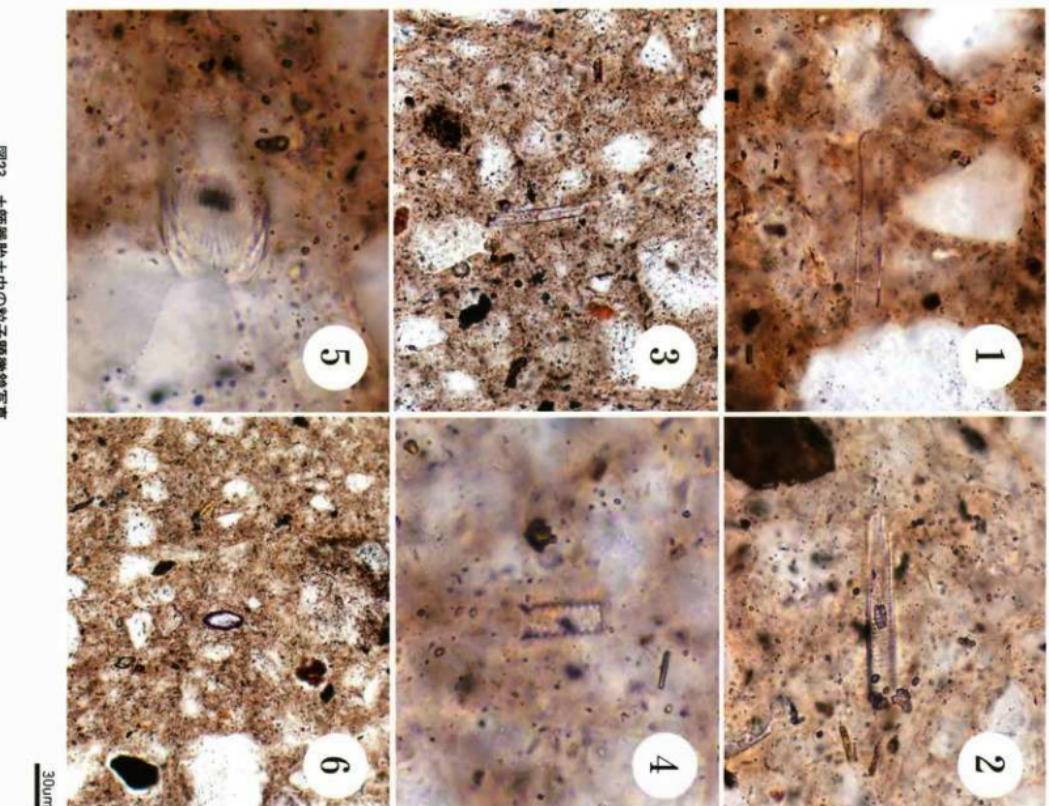


図23 土師器胎土中の粒子顕微鏡写真

- 1. 珊藻化石 (*Eunotia biaerefera*)
- 2. 珊藻化石 (*Eunotia*属)
- 3. 骨針化石
- 4. 珊藻化石 (*Melosira granulata*)
- 5. 珊藻化石 (*Cocconeis placenta*)
- 6. ジルコン

30μm

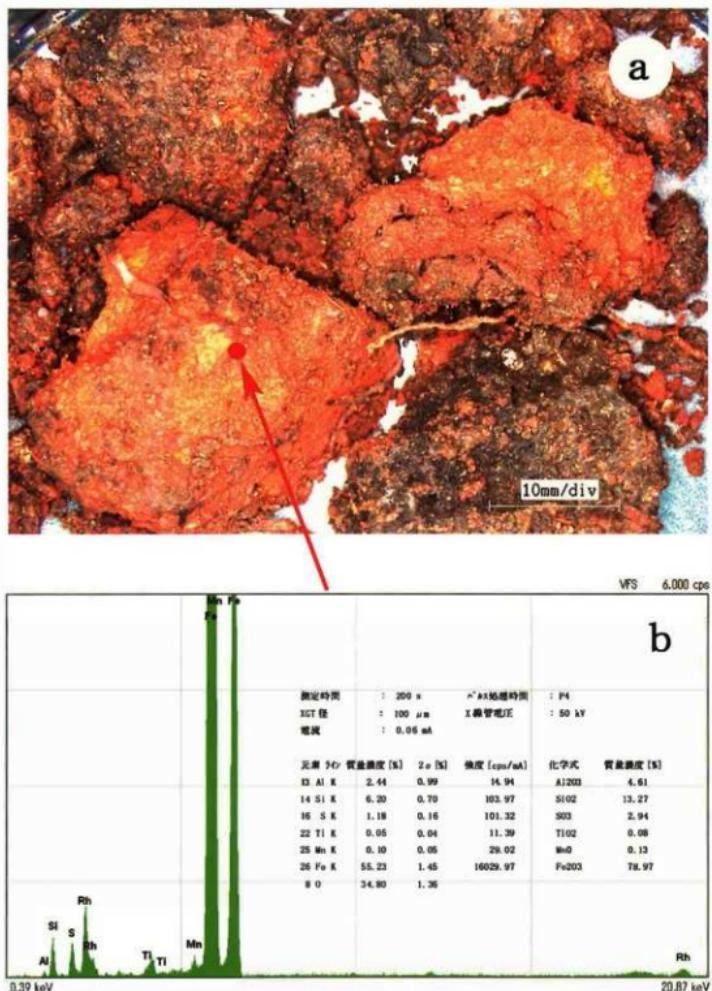


図24 赤色顔料塊とポイント分析結果

a : 赤色顔料塊のマイクロスコープ写真

b : ポイント (矢印) 分析のスペクトル図と分析結果

第5章まとめ

第1節 調査区内の動向

今回の調査では、古墳時代以降の遺構と遺物を発見した（表7）。

古墳時代では5世紀末～7世紀初頭にかけて11号古墳が、7世紀中頃に7号古墳がそれぞれ構築される。11号古墳の構築時期の確定はできないが、出土遺物より5世紀末～6世紀初頭からこの地に人々の往来があったことがわかる。その後、江戸時代末まで人々は痕跡をほとんど残していないが、8世紀中頃の須恵器片が1点のみ出土している。江戸時代末には、残りの良い瀬戸美濃産の土瓶が7号古墳の墳丘上から出土した。古墳の墳丘を利用して中世墓や近世墓が造られる事例は、揖斐郡池田町願成寺西墳之越古墳群（横幕1999）、可児郡御嵩町金ヶ崎遺跡（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003）、可児市前山3・5号古墳（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003）など数多くが知られている。そのうち、近世墓が発見さ

表7 調査区内の動向

西暦	時代	遺構	遺物	備考
B.C.550	旧石器時代			
	縄文時代			
	弥生時代			
A.D.250	古墳時代	前期		
600	古墳時代	後期	11号古墳	須恵器 土師器 金属製品 古墳構築
800	飛鳥時代	中期	7号古墳	須恵器
1000	奈良時代	後期	7号古墳	須恵器
1200	平安時代	後期	7号古墳	須恵器
1400	鎌倉時代	後期	7号古墳	須恵器
1600	室町時代	後期	7号古墳	須恵器
1800	安土・桃山時代	後期	7号古墳	須恵器
江戸時代	後期	7号古墳	須恵器 土師器 金属製品 瓦	神社・祠 などに利用
明治時代以降	後期	7号古墳	須恵器 土師器 金属製品 瓦	神社・祠 などに利用

※弥生時代の始まりの西暦は赤坂・石川2003に、
古墳時代の始まりの西暦は赤坂2003にそれぞれ従った。

れた金ヶ崎遺跡や前山3号古墳の出土遺物には、練鉢や土瓶などの大型の調理具が比較的多く使用されている傾向がある。当遺跡においても、調査区に接して小さな祠が存在していたため、江戸時代末～明治時代にかけては信仰の対象地となっていた可能性もある。

第2節 古墳の時期と形態

今回の調査検出した3基の古墳の諸要素をまとめると表8のようになる。

7号古墳は成瀬氏による横穴式石室の分類（成瀬1985）によると、石室の平面型はⅢ型式、玄室の平面形はB類、羨道の平面形はc類となる。氏によると美濃地方において形式Ⅲ-B-cは7世紀初頭～7世紀末までみられるとしており、7号古墳の構築時期が7世紀中頃であるので、その時期の平面形として、当地方の一般的な形態を採用したといえる。また、7号古墳の石室の一特徴として、玄室内の側壁には川原石が、羨道部の側壁の下段には川原石、同上段には山石（チャート）が、それぞれ用いられていることが挙げられる。その類似例として関市塚原7号墳、富加町稻荷山古墳などがある。塚原7号墳は6世紀末～7世紀初頭の構築で、両袖式の横穴式石室を有する。玄室と羨道部は大半が川原石を用いているが、羨道部先端に2つの大きな山石を配置している。羨道部に川原石と山石を併用するという点で七反田番場山7号古墳と同じだが、山石を配置する場所が異なり、奥壁も山石と川原石の併用する点で異なる。稻荷山古墳は6世紀後半の構築で、無袖式の横穴式石室を有する。詳細は不明であるが、報告書の写真図版をみると下段に川原石、上段に山石を積んでいるようである（早川 他1970）。この3つの古墳は構築時期や規模が異なるため、安易に比較することは避けるべきであるが、長良川中流域でこのような古墳が分布している事実は看守すべきであろう。

10号古墳は同じく成瀬氏の横穴式石室の分類によると、石室の平面型と羨道の平面形は不明で、玄室の平面形はB類となる。この古墳は7号古墳に比べて石室が小規模であり、出土遺物がないことから築造時期は不明である。このような小石室はその出現期から古墳時代終末期に至るまで、規模の大きな石室と併存し続け、美濃地方では遅くとも7世紀中頃には出現しているとされている（横幕2004）。

11号古墳は5世紀末～6世紀初頭に構築され、6世紀末～7世紀初頭に再利用したという考え方と、6世紀末～7世紀初頭に構築されたという考え方の2通りがある。美濃地方における古墳時代中期末～後期初頭の主体部が木棺直葬である古墳は、美濃南西端に位置する海津地域の東天神古墳群、同東端に位置する恵那地域の森山古墳群などの7古墳40基、同中央部に位置する各務地域の熊田山北古墳群などが知られており（成瀬2002）、同北端に位置する郡上市白鳥町の西ヶ洞古墳群（岐阜県文化財保護センター1995）を加えても、その数は極めて少ないとわかる。仮に11号古墳の時期を5世紀末～6世紀初頭とすると、上記のどの地域にも属さない地域で新たに確認されたことになり、その意義は大きい。しかし、発掘調査では6世紀末～7世紀初頭の再利用の痕跡を確認できていないことも留意すべきである。また、6世紀末～7世紀初頭に構築されたとすると、これまで美濃地方で確認されている木棺直葬墓の最終年代より100年弱の隔たりを経ることになる。このような類例がこれまで美濃

表8 古墳の諸要素

	7号古墳	10号古墳	11号古墳
墳形	円墳	不明	円墳か
規模	直径約13.8m	不明	不明
外部施設	外縁列石・周溝あり	確認できなかった	周溝あり
主体部	横穴式石室・両袖式	横穴式石室	木棺直葬
主体部幅	約3.2m	残存長約1.8m	残存長約1.8m
主体部幅	約3.2m	約0.6m	約0.4m
副葬品等	須恵器・土師器	なし	須恵器・土師器・鉄鎌
築造時期	7世紀中頃	不明	5世紀末～6世紀初頭or 6世紀末～7世紀初頭

地方ではないことや、調査では墓坑と周溝より5世紀末～6世紀初頭の遺物が出土していることなどから、11号古墳の構築時期を6世紀末～7世紀初頭と断定できない。このように11号古墳の構築時期について慎重にならざるを得ず、今後の検討に委ねることにする。

第3節 古墳の石室石材

七反田番場山古墳群のある番場山は、美濃帶堆積岩類のチャートの山であり、チャートの角礫が存在する。また、番場山の東を長良川が流れているため、上流の地質を反映して数種類の川原石（円礫）が存在する。

石室に使用されている石材としては、美濃帶堆積岩類であるチャート・砂岩、奥美濃酸性岩類、及び飛流紋岩類である溶結凝灰岩・花こう斑岩・石英斑岩・花こう岩、そして安山岩がある。これらの岩石は長良川の上流域に分布する主な岩石であり、番場山の東を流れる長良川から得ることができる。また、上記以外の岩石も長良川の礫として存在するが、分布範囲が限られており、少量である。石室に使用されている岩石は、近くのチャート（角礫）及び長良川の川原に見られる主な円礫からなり、遠方から運んだという可能性を考える必要はないだろう。

以下に、2基の古墳の石材について述べる。7号古墳に関しては、玄室内と羨道部の石材の特徴が異なっているため、それぞれ分けて説明する。古墳の側壁石には様々な大きさのものが使用されているが、平均径が約15cm以下のものが大きな石と石の間に詰めてあり、詰めてある石とそうでない石を区別するため平均径が15cm以上と未満に分けて石材の分類を行った（表9・図25）。7号古墳の両側の立柱石はいずれもチャートでできており、これら2個については玄室と羨道の表には入れていない。

【7号古墳玄室】：径15cm以上は、約50%が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約25%を占め、砂岩、花こう岩、安山岩、チャートはいずれも10%以下である。径15cm以下の石は、多い順から溶結凝灰岩：約45%、砂岩：約20%、チャート：約15%である。

【7号古墳羨道】：径15cm以上は、約65%がチャートで、溶結凝灰岩と花こう斑岩などが合わせて約30%である。径15cm以下の石は、チャート、砂岩、溶結凝灰岩がほぼ同じで約30%ずつである。

【7号古墳（全体）】：径15cm以上は、約40%が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約20%、チャートが約15%を占め、砂岩、花こう岩、安山岩はいずれも10%以下である。径15cm以下の石は、多い順から溶結凝灰岩：約40%、砂岩：約25%、チャート：約20%、安山岩：約10%である。

【10号古墳】：径15cm以上は、約50%が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約20%を占める。径15cm以下の石は、チャート：約65%、砂岩：約25%、溶結凝灰岩：約10%であった。

2基の古墳の石材について、石材の個数が多くないため特徴については一概に言えないが、次の4点があげられる。

- ・ 7号古墳の玄室と羨道の石材の違いは明確で、玄室は90%以上が円礫であり、羨道は3分の2近くが角礫（チャート）である。
- ・ 7号古墳の下部の1、2段は玄室、羨道とも俵形の円礫を使用している。礫種からするとほとんどが花こう斑岩、溶結凝灰岩である。この2種類の岩石は、石材の性質上、柱状節理で割れることがあり、それが川の運搬により俵形の円礫になったものである。
- ・ 7号古墳玄室内と10号古墳における15cm以上の石材は、溶結凝灰岩と花こう斑岩が多く、両方で約70%を占める。
- ・ 7号古墳と10号古墳における15cm以上の石材は、それぞれの石材の量比について10%以上の違いは見られない。

表9 7・10号古墳の石材一覧

[径15cm以上]

	美濃帯堆積岩類		奥美濃酸性岩類、濃飛流紋岩類			安山岩
	チャート	砂岩	溶結凝灰岩	花こう礁岩、石英班岩	花こう岩	
7号古墳玄室	3	6	49	24	10	7
7号古墳狭道	13	1	2	4	0	0
7号古墳	18	7	51	28	10	7
10号古墳	4	4	15	6	0	1

[径15cm未満]

	美濃帯堆積岩類		奥美濃酸性岩類、濃飛流紋岩類			安山岩
	チャート	砂岩	溶結凝灰岩	花こう礁岩、石英班岩	花こう岩	
7号古墳玄室	11	15	30	1	0	8
7号古墳狭道	13	13	13	1	0	1
7号古墳	24	28	43	2	0	9
10号古墳	20	8	4	0	0	0

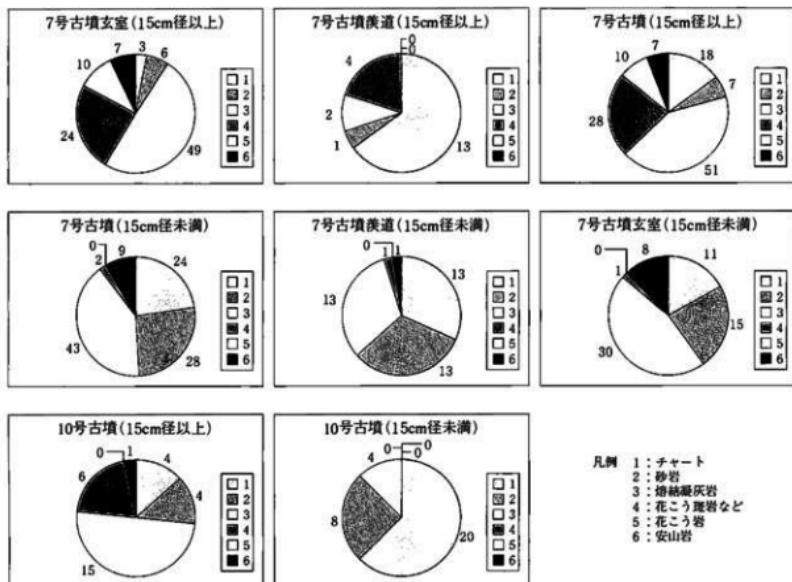
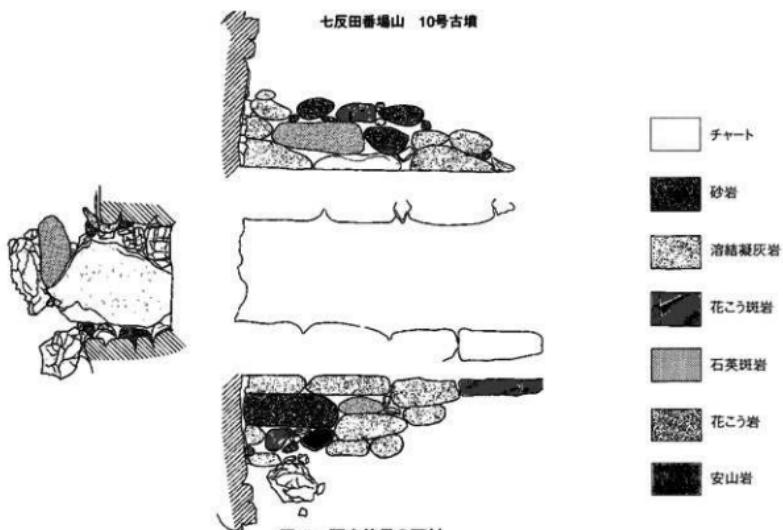
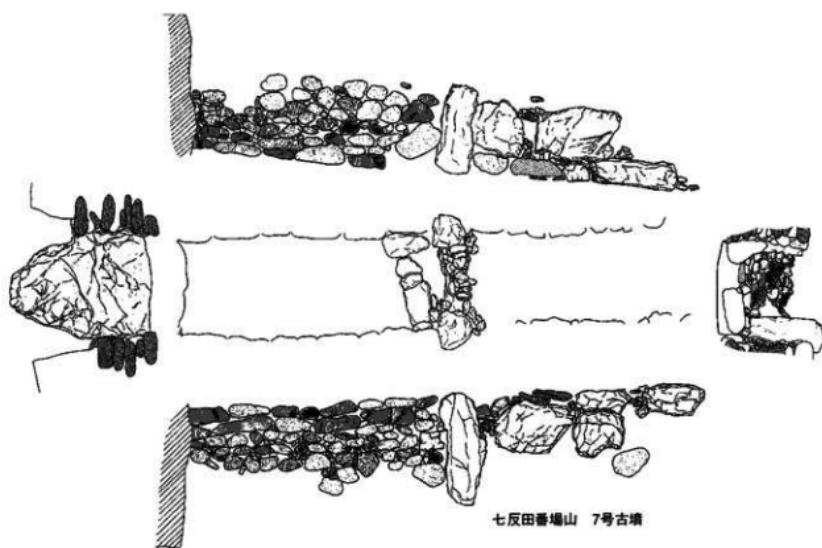


図25 7・10号古墳の石材一覧

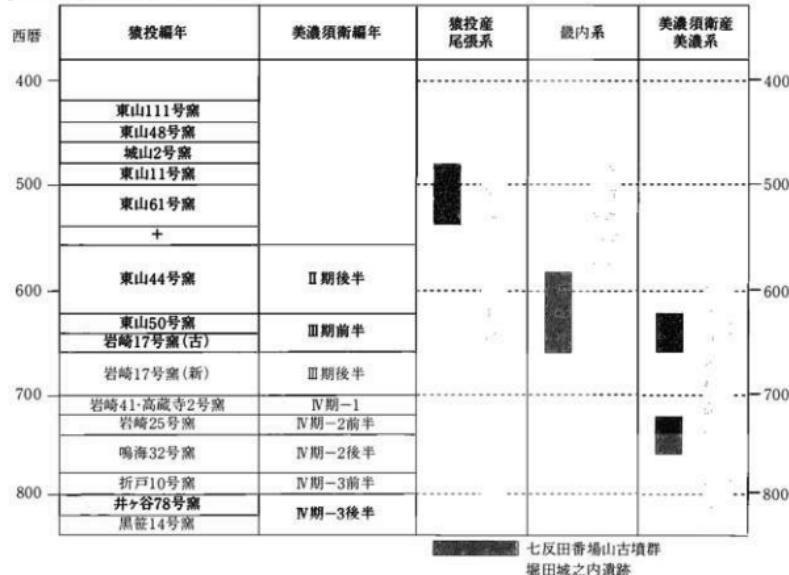


第4節 須恵器の産地比較

ここでは今回の調査で最も出土量の多い須恵器の産地に着目する。出土した須恵器は猿投産（尾張系）、美濃で焼成された畿内系、美濃須衛産（美濃系）の3種類の胎土に分類できる（渡邊1996）。胎土毎の時期をまとめると、猿投産（尾張系）が5世紀末～6世紀前半、美濃産（畿内系）が6世紀末～7世紀初頭、美濃須衛産（美濃系）が7世紀中頃と8世紀中頃となる。このような時期による産地の選択が、当遺跡周辺で普遍的な現象であるのかを知るために、当遺跡と同じく岐阜市の長良川右岸に位置する堀田城之内遺跡の須恵器を検討する（岐阜市遺跡調査会1996、岐阜県文化財保護センター1997）。堀田城之内遺跡は、当遺跡から約4.5km下流にある縄文時代から近世まで続く集落遺跡であり、古墳時代の須恵器が多量に出土している。その須恵器は、猿投産が5世紀末～6世紀前半、6世紀末～7世紀中頃、8世紀後半～9世紀前半、畿内系が5世紀末～6世紀後半、美濃須衛産が6世紀末～9世紀代まである（表10）。つまり、七反田番場山古墳群で使用されている須恵器の産地のうち、猿投産（尾張系）と美濃須衛産（美濃系）は同時期に堀田城之内遺跡でも使用されていたといえるが、畿内系須恵器は七反田番場山古墳群と堀田城之内遺跡で使用する時期が全く異なっていたといえる。

比較の対象とした遺跡の性格が古墳と集落遺跡であることや、今回の調査では古墳2基からしか遺物が出土しなかったため、このような差が本当に存在するのか慎重に判断せねばいけないが、今後同様の分析を重ねれば明らかとなっていくと思われる。

表10 須恵器の時期と産地の比較



引用・参考文献

- 赤塚次郎 2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」
『第5回考古科学シンポジウム発表要旨』名古屋大学年代測定総合研究センター
(財)岐阜県文化財保護センター 1997『堀田城之内遺跡』
(財)岐阜県文化財保護センター 1995『西ヶ洞遺跡・西ヶ洞古墳群』
(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2003『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2003『杉ヶ洞3・5号古墳 前山2号古墳』
岐阜市 1979『岐阜市史 史料編 考古・文化財』
岐阜市 1980『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』
岐阜市遺跡調査会 1996『堀田・城之内』
齊藤孝正 1995「I 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編 I』雄山閣出版
武末純一・石川日出志 2003「弥生時代早期から中期の編年表」
『考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器1』小学館
長瀬治義 1994「第3項 濃尾の川原石積石室」「川合遺跡群」可児市教育委員会
成瀬正勝 1985「横穴式石室の型式と変遷について—特に美濃地方の場合—」『岐阜史学』第79号
成瀬正勝 2002「美濃の中期古墳」「古墳時代中期の大形墳と小型墳」第10回東海考古学フォーラム
早川正一 他 1970『富加町の古墳』富加町教育委員会
横幕大祐 1999『願成寺西墳之越古墳群資料調査報告書』池田町教育委員会
横幕大祐 2001「美濃地方における後期古墳の状況」「東海の後期古墳を考える」
第8回東海考古学フォーラム
横幕大祐 2004「美濃における古墳終末に関する覚書」「かにかくに 八賀晋先生古稀記念論文集」
渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋杯の型式設定とその編年試案—」
『美濃の考古学』創刊号

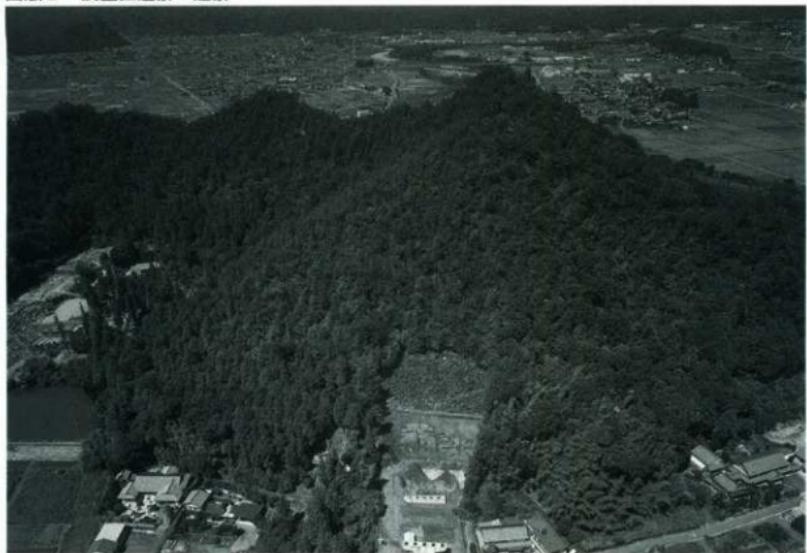
写 真 図 版

調査区遠景 図版1



調査区遠景（南西から）

図版2 調査区遠景・近景

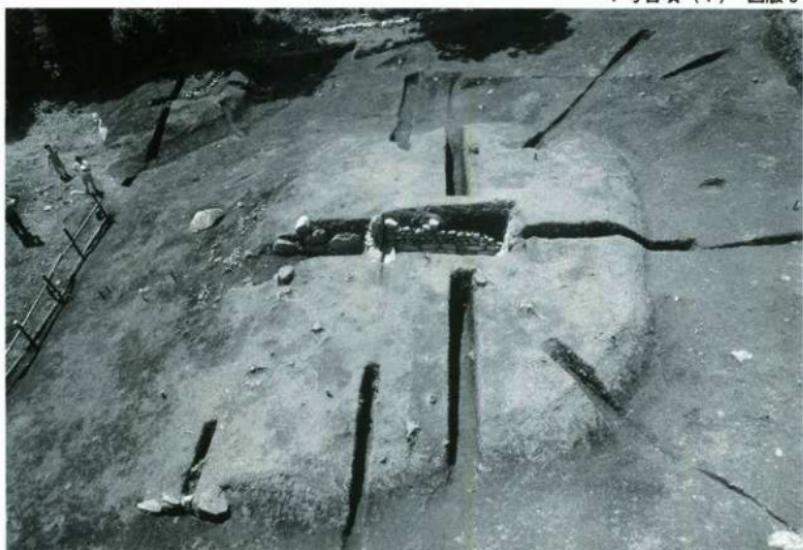


調査区遠景（南から）

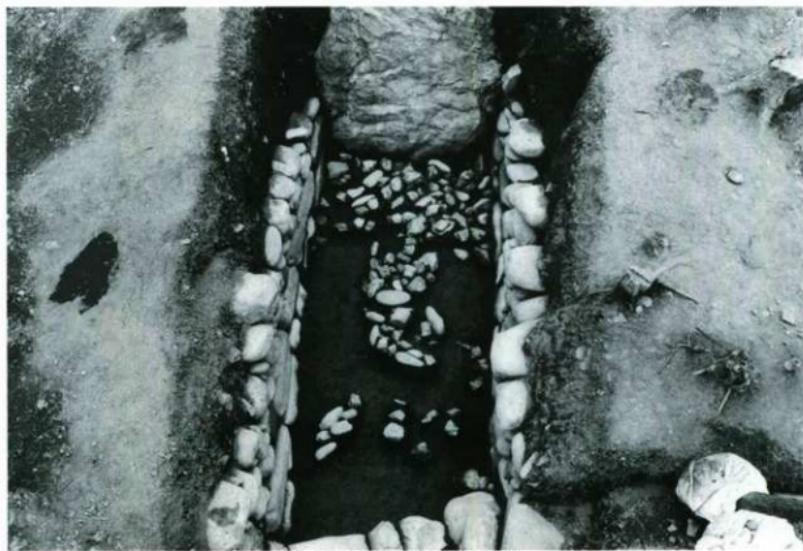


調査区近景（北から）

7号古墳（1）図版3



7号古墳近景（東から）



7号古墳床面検出状況（南から）

図版4 7号古墳（2）



7号古墳石室側壁石検出状況（北西から）



7号古墳石室側壁石検出状況（北東から）

7号古墳（3） 図版5



7号古墳閉塞石検出状況（北西から）



7号古墳閉塞石検出状況（北から）



7号古墳閉塞石検出状況（南から）



7号古墳閉塞石検出状況（東から）



7号古墳床面検出状況（北から）

図版6 7号古墳(4)

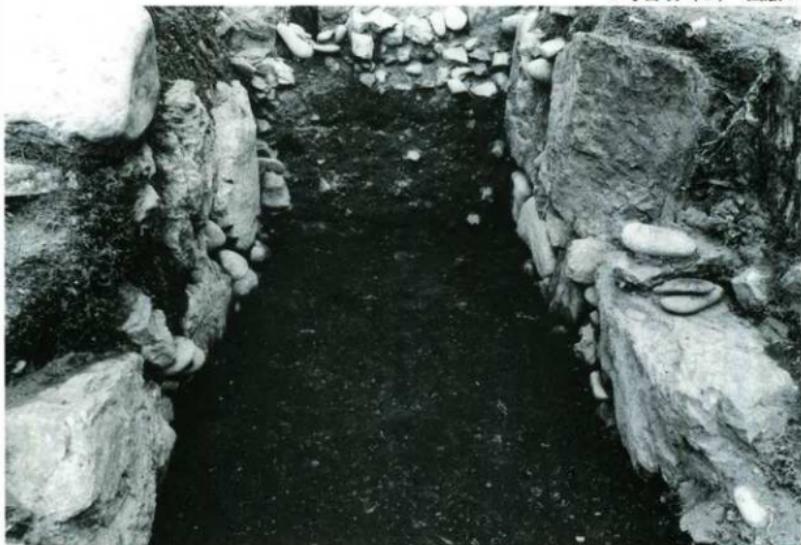


7号古墳羨道部側壁石検出状況（東から）



7号古墳羨道部側壁石検出状況（西から）

7号古墳(5) 図版7



7号古墳羨道部完掘状況（南から）



7号古墳前庭部検出状況（南から）



7号古墳遺物出土状況（南から）



7号古墳調査前風景（南から）



7号古墳天井石検出状況（南から）

図版8 10号古墳



10号古墳石室完掘状況（南から）



10号古墳石室側壁石検出状況（南東から）



10号古墳石室側壁石検出状況（南西から）



10号古墳石室検出状況（南から）



10号古墳石室完掘状況（北から）



11号古墳墓坑検出状況（北から）



11号古墳盛土検出状況（南から）



11号古墳遺物出土状況（南から）

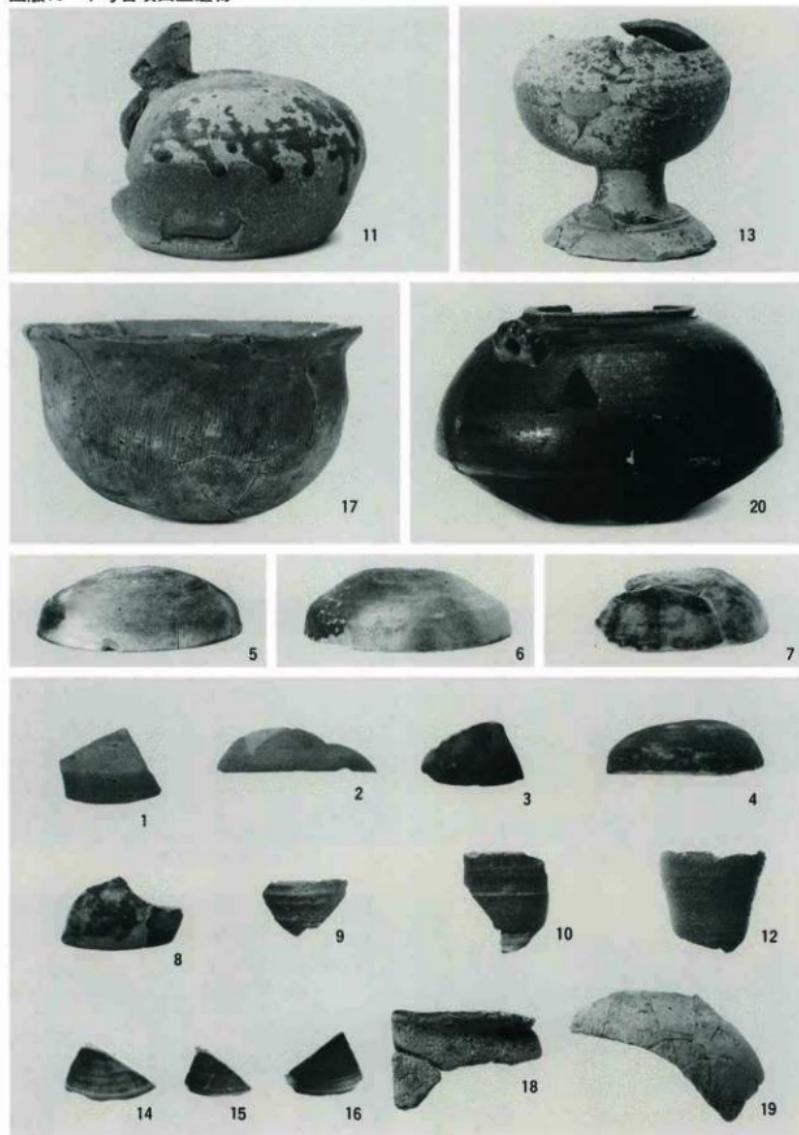


調査前風景（南から）

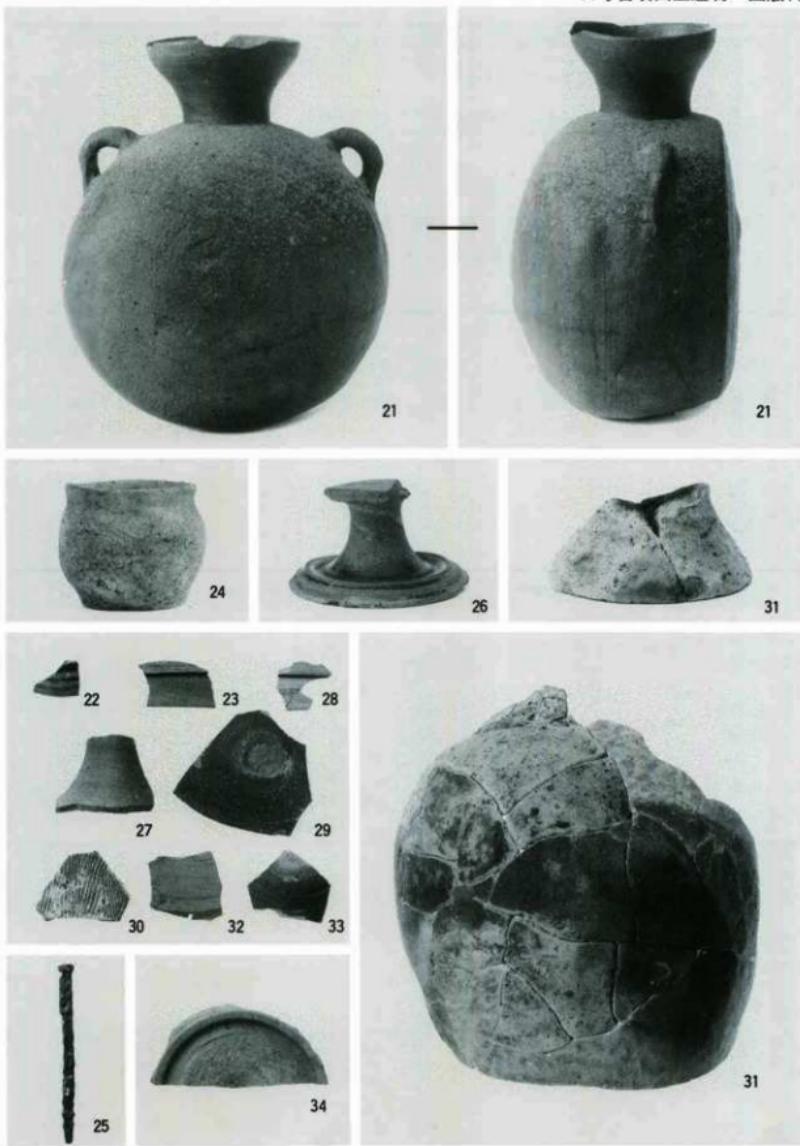


作業風景（南から）

图版10 7号古墳出土遗物



11号古墳出土遺物 圖版11



報告書抄録

ふりがな	ななたんだばんばやま 7・10・11ごうこふん						
書名	七反田番場山7・10・11号古墳						
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第93集						
編著者名	三浦徹大、小野木学、藤岡比呂志						
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550						
発行年月日	西暦2005年3月18日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
七反田番場山 7号古墳	岐阜県岐阜市加野山本 10号古墳	21201	10126	35° 27'	136° 49'	20030512～ 20030818	主要地方道岐 阜美濃線番場 山トンネル工 事に伴う
七反田番場山 10号古墳		21201	10129	53"	55"	800m ²	
七反田番場山 11号古墳		21201	10130				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
七反田番場山 7号古墳	古墳	古墳時代	円墳 横穴式石室	須恵器 土師器 近世陶器			古墳時代中期～後期の 古墳を3基検出した。
七反田番場山 10号古墳	古墳	古墳時代	墳形不明 横穴式石室	なし			
七反田番場山 11号古墳	古墳	古墳時代	円墳か 木棺直葬	須恵器 土師器 金属製品			

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第93集

七反田番場山 7・10・11号古墳

2005年3月18日

編集・発行 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
印 刷 安藤印刷株式会社